

アリア「いとしい人よ、もし私の苦しみのすべてを」 K.deest の先人たち
Origin of the aria for soprano "Cara, se le mie pene" K.deest

野口秀夫
Hideo Noguchi

Origin of the text:

L'aria sostitutiva "Cara, se le mie pene" (II. 6, Poro) dal testo
Nell'*Alessandro nell'Indie*. Drama per musica.

Librettista originale: Pietro Metastasio.

La Musica è del Baldassare Galuppi (1755), Niccolò Piccinni (1758),
Tommaso Traetta (1762), Johann Christian Bach (1763) o Antonio Sacchini (1766).

1. はじめに

鳥代：先日はノットウルノ K.346 と K.439 の歌詞の原典を突き止めましたが、残念ながら歌唱部分はジャカンが作曲したもので、モーツァルトはオーケストレーションだけを受け持ったのでした^{注1}。今日はモーツァルト真作とされる作品から歌詞の原典が不明な曲を取り上げましょう。アリア「いとしい人よ、もしあなたが私の苦しみのすべてを」 K.deest です。

犬輔：ケッヒェル番号が付いていませんが、どういうことですか。真作なんでしょう？

教授：説明しよう。ザルツブルクのカロリーノ・アウクスターウム博物館で「ヴォルフガング・モーツァルト氏による」と書かれた筆写パート譜セットが発見され、モーツァルトの作品として 1966 年にヴォルフガング・プラートによって新全集先行出版された^{注2}。出版譜の序文によれば写譜師はコピスト B であり、この写譜師の手になる多数の楽譜のうちランバッハ修道院に寄贈されタイトルページに“作者寄贈 1769.1.4 Dono Authoris / 4ta Jan : 769”と書かれているモーツァルト父子の交響曲パート譜（いわゆる旧ランバッハ交響曲 K.Anh.211 (45a) 及び新ランバッハ交響曲 G16) と筆跡が似ており、準アイデンティティを想定できるという。さらにプラートは「合理的な仮定によれば、このコピーは 1768/69 年の変わり目に作成された。したがって 1769 年頃のほぼ対応する期間に、私たちのアリアのパート譜が完全に書き出されていたと考える必要がある」と述べている^{注3}。

犬輔：それは筆写譜の年代であって、作曲時期とは異なりますよ。旧ランバッハ交響曲の作曲は 1766 年ですが。作曲年代に関してプラートはどう言っているのですか。

教授：こう述べている。「アリアは疑いの余地がなくはないが、十分な確率で、本物と呼ぶことができる」と信じる。モーツァルトは私たちが知らない特定の理由で——おそらくザルツブルクでの知人のサークルでの室内楽のために——ザルツブルクの詩人の詩に曲を付けたが、1769 年を当面の想定日と見なす可能性があるにもかかわらず、1760 年代の終わりにかけて、下限（1766/67）に向かって移動する可能性もあり、しかしイタリアへの旅行 [1770] の時まで、あるいはその後はほとんどないと信じる」。ここでプラートは筆跡年代学や用紙の年代学に言及していないことに注意しておこう。モーツァルトに関して適用されていたこれらの手法が写譜師にも適用できるかどうかは未だ研究が進んでいないからだ。

鳥代：出版楽譜冒頭には「ザルツブルク、おそらく ca. 1769 作曲」と書かれているわ。この簡潔な表現を引用して年代の一人歩きが始まってしまったのは仕方のないことだね。

教授：では、ここで歌詞を見ておこう。ソプラノだが歌詞からは男役であることが分かる。

表 1 ソプラノアリア「いとしい人よ、もし私の苦しみのすべてを」 K.deest 歌詞

歌詞	訳詞	備考
Cara, se le mie pene Tutte scordar mi fai, Non separarti mai Da questo amante cor. Stelle, se giuste siete, Pietose proteggete Il suo fedele amante, Il mio costante amor.	いとしい人よ、もし私の苦しみのすべてを 私に忘れさせてくれるのなら、 けっして離れないで下さい。 愛するこの心から。 星々よ、もし公正でいらっしゃるのでしたら、 憐れんでお守り下さい、 あの人の忠実な恋人を、 私の変わらぬ愛を。	海老澤敏訳 小学館モーツァルト全集
7 音節詩行 Ca·ra, / se / le / mie / pe·ne Tut·te / scor·dar / mi / fa·i, Non / se·pa·rar·ti / ma·fi Da / que·sto a·man·te / cor. Stel·le, / se / gius·te / sie·te, Pie·to·se / pro·teg·ge·te Il / suo / fe·de·le a·man·te, Il / mio / co·stan·te a·mor.	いとしい人よ、もし私の苦しみのすべてを 私に忘れさせたいのなら、 この愛する心から決して 離れないでください。 星々よ、もし公正でいらっしゃるなら、 思いやりをもって 彼女の忠実な最愛の人と、 私の変わらない愛を守ってください。	野口秀夫訳 星々＝運命の神の象徴

犬輔：ケッヘル番号がついてないのは新発見だからと理解しておけばいいんだ。真作かどうかも留保付きなんですね。ところで作詞者についてプラートはザルツブルクの詩人と信じているとのことですが、もっと詳しくは述べていないのでしょうか。

教授：こう書いている。「未知の詩人の詩行はそれぞれがセーリア・スタイルで繋がれたトポス〔特定概念〕として素直に識別できる。この状況設定は、ほとんどすべてのオペラに対応できる」として。詩人に関する注記には「ルフレイド・ヴォトケン編集の『ゼーノ、メタスタージョそしてゴルドーニの詩作品のアルファベット順目録』（1905、ライプツィヒ）にエヴィデンスなし」とあるから同時代の詩人の詩作品のフレーズは調査をしての結論だ。

犬輔：あっ、その目録です。ぼくが前回言及したのは^{注4}。やはり、ネット検索時代以前にはこの目録が重宝していたんだ。

鳥代：ところでプラート以後に新しい発見はなかったのでしょうか。

教授：新全集の楽譜巻が 1967 年に、校訂報告が 2007 年に出版されているが進展は見られない。ただ、コピスト B については研究が進んで、現在ではヨーゼフ・リヒャルト・エストリンガーと分かっており、信頼できるザルツブルクの写譜師と認定されている^{注5}。また根拠の説明はないが、ケンブリッジ・モーツァルト・エンサイクロペディアには以下のリストが掲載されている^{注6}。これはクリフ・アイゼンの説だ。

K	First words (author)	Accompaniment	Place, date	NMA	Remarks
—	Cara se le mie pene (?Metastasio, Alessandro nell'Indie)	2 hn, vn, va, b	?, by mid-1772	II:7/I	

鳥代：あら、作曲場所が“不明”になっていて、年代は“1772 年中頃以前”になっているのね。それ以上に驚くのは作詞者が“？メタスタージョ、『インドのアレッサンドロ』”となっていることよ。

犬輔：それは原典調査のきっかけを示してくれる貴重な情報ですよ。

2. メタスタージョ台本『インドのアレッサンドロ』

鳥代：『インドのアレッサンドロ』を調べてみました。メタスタージョの劇作にレオナルド・ヴィンチが曲をつけ、1730 年にローマで音楽劇として上演されたのが最初です。でも、この音楽劇の台本^{注7}に「いとしい人よ」は含まれていません。

犬輔：とりあえず《インドのアレッサンドロ》の粗筋を調べましょう^{注8}。

【概要】

アレクサンドロス大王のインド遠征と、紀元前 326 年のヒュダスペス河畔の戦いでのポロス王の敗北の物語です。戦いの後、2 人の王は和解し、アレクサンドロスはポロス王国の支配者にして去りました。劇はヒュダスペスのほとりで行われ、アレクサンドロスの野営地は川の片側にあり、クレオフィーデの住居は反対側にあります。

【配役】

アレッサンドロ（アレクサンドロス 3 世、いわゆる大王）、
ポーロ（ポロス）：インドの王、クレオフィーデの恋人、
クレオフィーデ（クレオフィス）：インドの女王であり、ポーロの恋人である
エリッセーナ：ポーロの妹、
ガンダルテ：エリッセーナを愛するポーロの友人であり將軍
ティマゲーネ（コイノス）：アレクサンドロスの將軍で秘密の敵

【第 1 幕】

ポーロの敗北後のインド人野営地

幕が開くと、インドの兵士がアレッサンドロの軍隊から逃げているのが見えます。インドのポーロ王は彼らの逃亡を止めようとしますが、それができず、彼は自殺しようとします。彼の將軍ガンダルテが王に最愛のクレオフィーデを思い出させ阻止します。しかし、ポーロは彼女がアレッサンドロと関係があったと信じています。王を守るために、ガンダルテは服を交換することを申し出、以後、ポーロはアスピーテとして現れ、ガンダルテはポーロとして現れます。少し後、アスピーテ（ポーロ）は短い戦いの後でティマゲーネに捕らえられます。アレッサンドロがやって来て、不必要な血をこぼさないように命じます。アスピーテ（ポーロ）は自分をポーロの友達として紹介するとアレッサンドロは彼を解放し、平和を確保する約束だけよいことをポーロに伝えるように依頼します。彼はまた自身の剣を贈り物として与えます。ポーロはこれを受け入れますが、自分自身に対してそれを使用すると誓うのでした。

ティマゲーネは、二人のインド人から引き渡されたポーロの妹エリッセーナを捕虜としていました。アレッサンドロはこの行為にぞっとします。彼は二人の裏切り者を拘束してポーロに引き渡すように命じます。ティマゲーネの反対にもかかわらず、エリッセーナはすぐに開放されます。アレッサンドロが去った後、エリッセーナはティマゲーネにアレッサンドロにどれほど感銘を受けたかを話します。エリッセーナに惹かれているティマゲーネは嫉妬に苦しみます。

木々に囲まれた日陰の場所

ポーロは、アレッサンドロの勝利を、アレッサンドロの恋人であると彼が考えているクレオフィーデに関

連付けています。しかし、クレオフィーデは彼への変わらぬ愛を保証し、自分を信頼するように頼みます。彼は二度と嫉妬しないことを誓いますが、クレオフィーデが到着したばかりのエリッセーナに、アレクサンドロが自分のことを話していたかどうかを尋ねたため、彼の嫉妬はすぐに再燃します。クレオフィーデはアレクサンドロの野営地に向けて出発します。エリッセーナはポーロにクレオフィーデを信頼するように忠告しますが、彼は彼女を追跡しようと思っています。ガンダルテが到着し、ティマゲーネがアレクサンドロの敵であり、したがってまだ勝利への希望を持っていることを知らせます。彼はまた、クレオフィーデを追いかけないようにポーロにアドバイスします。それでもポーロは行くでしょう。エリッセーナがアレクサンドロのことをガンダルテに熱弁して言うには、アレクサンドロは、ポーロがすでに彼女を彼に約束したと思っている、と言います。

アレクサンドロの野営地を望む大きな天幕とヒュダスペースの反対側のクレオフィーデの住居

クレオフィーデはヒュダスペースを越えてアレクサンドロに贈り物を届けます。彼は拒否します。友人からの贈り物を受け取らず、ただ家臣に忠誠を要求する方針なのです。ティマゲーネはアスピーテ（ポーロ）の到着を告げます。アスピーテ（ポーロ）はクレオフィーデの前でアレクサンドロと話したいと言います。アスピーテ（ポーロ）は、ポーロが敗北したとは考えておらず、平和の提案を拒否していると説明します。クレオフィーデはアレクサンドロをなだめようとし、ポーロの本当の意図を知るためにと彼を彼女の住居に招待します。彼女はアスピーテ（ポーロ）がポーロを誤解したに違いないと確信します。しかし、アスピーテ（ポーロ）はポーロの意図をよく知っている彼女に保証し、かつてポーロを愛し、現在は彼に不誠実になっているクレオフィーデについてアレクサンドロに警告します。新たな嫉妬でポーロを罰するために、クレオフィーデはアレクサンドロへの愛を宣言します。アレクサンドロは彼女の友情を約束しますが、彼の心は約束しません。彼は去り、ポーロはクレオフィーデと和解します。

【第2幕】

クレオフィーデの宮殿の部屋

ポーロとガンダルテは、ティマゲーネの支援を頼りに、ヒュダスペースに架かる橋を占領することを計画しています。エリッセーナがアレクサンドロの到着を報告すると、ポーロはクレオフィーデの不貞の疑いについて再び考えます。ガンダルテは彼に彼女を忘れるように忠告し、去ります。エリッセーナは再びアレクサンドロに会いたいと言い、ポーロは彼女を追い出します。彼はクレオフィーデを避けるつもりであり、アレクサンドロに対する勝利を期待しています。

ヒュダスペースに架かる橋のそば、遠い岸にギリシャの野営地がある

アレクサンドロとティマゲーネは軍隊と橋を渡ります。クレオフィーデが従者とともに会いに来て、友好的に挨拶します。ポーロが攻撃し、銃の音によって挨拶は中断されます。アレクサンドロとティマゲーネは橋に急ぎます。

攻撃はアレクサンドロによって撃退されました。クレオフィーデは逃げるポーロに彼女と離れないように頼みますが、彼女が川に飛び込むと脅し、最終的に彼に結婚を約束したとき、**やっとな彼は離れないことに同意します**。敵が近づくと、ポーロは短剣を引き抜いてクレオフィーデと彼自身を刺そうとしますが、アレクサンドロはそれをひたたくります。自らの行動を正当化するために、アスピーテ（ポーロ）は正体を明らかにしたいと思いますが、ティマゲーネの到着によって中断されます。ティマゲーネは、兵士がクレオフィーデを待ち伏せの罪で非難しており、彼女の血を要求していると報告します。しかし、アスピーテ（ポーロ）が自分の罪だと言うので、アレクサンドロは彼を逮捕し、ティマゲーネに引き渡します。クレオフィーデはアレクサンドロに彼を解放するように頼みますが無駄に終わります。ティマゲーネはクレオフィーデを彼の宮殿に送り、彼女は彼にポーロに不動のままにしておくように伝えてほしいと頼みます。ティマゲーネはアスピーテ（ポーロ）に、攻撃の失敗を非難しないことを保証する手紙を渡します。ティマゲーネは、アレクサンドロに対する彼の陰謀が最終的に成功することを望んでいます。

クレオフィーデの宮殿の部屋

クレオフィーデはガンダルテに、ポーロが彼女を愛から殺そうとしたと語ります。アレクサンドロが到着し、ガンダルテが隠れます。アレクサンドロはクレオフィーデに兵士の怒りを静めることができなかったと言い、クレオフィーデは殉教者として死ぬ覚悟をします。彼女を救うために、アレクサンドロは彼女と結婚することを申し出ます。クレオフィーデはこれを望まないで、まだポーロの格好をしていたガンダルテが仮装を解き、クレオフィーデを救うための犠牲として身を差し出します。アレクサンドロはこの貴族にとっても感銘を受けたので、クレオフィーデを彼に引き渡し、アスピーテ（ポーロ）も解放することを約束します。彼は去ります。エリッセーナがやって来て、ポーロがヒュダスペースに身を投げて死んだと報告します。エリッセーナは絶望的なクレオフィーデに逃げるように忠告します。

【第3幕】

宮殿の庭の屋根付きの柱廊

エリッセーナは死んだと信じられていたポーロに会いますが、彼の死の報告はティマゲーネが彼を解放した後、自分自身の保護のために広められたのでした。ポーロは今、庭でアレクサンドロを待ち伏せすることを計画していて、ティマゲーネに彼をそこに誘惑することを望んでいます。ティマゲーネが彼の側にいることを証明するために、ポーロはエリッセーナに彼からの手紙を渡します。ポーロが去った後、最初にクレオフィーデ、次にアレクサンドロが到着します。アレクサンドロはクレオフィーデに逃げるよう説得しようと思いますが、彼女は今、彼の結婚の申し出を受け入れたいと思っています。アレクサンドロは彼女に寺院で会うように頼み、去ります。

アレクサンドロは二人の警備員を連れて戻ってきて、ティマゲーネの計画的な待ち伏せを発見したとエリッセーナに報告します。エリッセーナはティマゲーネが彼女を裏切ったと信じ、アレクサンドロにティマゲーネの手紙を彼女自身の無実の証拠として手渡します。ティマゲーネの裏切りが明らかになったので、アレクサンドロはエリッセーナを遠ざけ、思いに耽ります。

アレクサンドロはティマゲーネに、友人に裏切られたらどうするか尋ねます。ティマゲーネが、そのような場合の質問があれば慈悲はなくなるだろうと答えると、アレクサンドロは彼に犯罪の手紙を見せます。

ティマゲーネは慈悲を懇願します。アレッサンドロは、彼が将来忠実であるならば、許す準備ができていると述べ、去ります。

アスピーテ（ポーロ）は計画された待ち伏せについてティマゲーネに話しに来ますが、ティマゲーネはもはやそれとは何の関係も持ちたくないのです。彼は去り、ガンダルテとエリッセーナがポーロのところに来てきます。エリッセーナは、クレオフィーデのアレッサンドロとの結婚式について彼に話します。ポーロは退場します。エリッセーナはガンダルテにポーロを助けるように依頼します。

燃える火葬場があるバッカス寺院

アレッサンドロとクレオフィーデは彼らの従者と共に入ります。数人のバッカス神の祭司が彼らと燃える松明を持った寺院の司祭の前を歩いています。ポーロは遠くから場面を見ています。アレッサンドロがクレオフィーデの手を握ったとき、彼女はこれが彼女の結婚式ではなく、彼女の死の時であると説明します。地元の慣習によると、未亡人は死んで夫に従う必要があります。彼女は燃え盛る山に急いで行こうとしますが、アレッサンドロに引き止められます。ティマゲーネは、彼がまだポーロであると信じているガンダルテを囚人として連れてきます。クレオフィーデは自分自身を炎に投げ込む別の試みをします。苦しみに耐えられないポーロは、踏み出し、姿を現し、許しを請います。彼はアレッサンドロが与えるどんな罰も受け入れる準備ができています。しかし、アレッサンドロはすべての人を許し、ポーロに妻と自由とともに王国を返します。その見返りに、ポーロは妹のエリッセーナの手でガンダルテの不動の友情に報い、アレッサンドロは彼にガンジスの向こうの土地を贈り物として与えます。オペラはアレッサンドロの名声を称賛する合唱で終わります。

アレッサンドロの超人的寛大さと、それと対照的なポーロの根深い嫉妬心がこれでもかこれでもかと描かれています。ポーロの気性の激しさが人間の弱さを浮き彫りにしていると言えるのですが、なかなかついていけない性格ですね。

鳥代：その複雑な人間関係のさなかに一瞬平和な様相を呈するのは、第 2 幕の「やっと彼 [ポーロ] は [クレオフィーデから] 離れないことに同意します」というところだけで、この部分にアリア「いとしい人よ」が追加され歌われた可能性があります。

犬輔：だったら、初版のオリジナルの歌詞はどのようなものだったのか、新しいアリアは挿入アリアなのか、代替アリアなのか、書かれた理由は何だったのか、これらは台本を翻訳してみなければ分からないんですね。よし、訳しましょう。

鳥代：翻訳は第 2 幕第 6 場だけでいいですよ^{注 9}。

表 2 メタステージ初版《インドのアレッサンドロ》(1730) 第 2 幕第 6 場

初版	訳
Scena sesta Poro esce dalla parte sinistra della scena senza spada seguito da Cleofide. CLEOFIDE (trattenendolo) Mio ben. PORO Lasciami.(si stacca da Cleofide) CLEOFIDE Oh dio. Sentimi, dove fuggi? PORO Io fuggo ingrata l'aspetto di mia sorte. Io fuggo l'ire dell'inferno e del ciel congiunti insieme contro un monarca oppresso, da te fuggo infedele e da me stesso. CLEOFIDE Lascia almen ch'io ti segua. PORO Io mi vedrei sempre d'intorno il mio maggior tormento. CLEOFIDE Dunque m'uccidi. PORO A' fortunati elisi tu giungeresti a disturbar la pace. Io non invidia tanto il riposo agl'estinti. CLEOFIDE Ah per quei primi fortunati momenti in cui ti piacqui, per l'infelice e vero non creduto amor mio, dolce mia vita non lasciarmi così. PORO Ti lascio alfine coll'amato Alessandro. CLEOFIDE E ancor non vedi che per punir l'eccesso della tua gelosia finisci incostanza.	第 6 場 ポーロが [舞台側から見て] 左から武器無しで登場。そしてクレオフィーデが続く。 クレオフィーデ (引き留めながら) 私の愛する人。 ポーロ 去れ。(クレオフィーデを振り切って) クレオフィーデ 何ですって。お聞きください、何から逃げるのですか? ポーロ 私は自分の運命の恩知らずな側面から逃げるのだ。私は抑圧された君主に対する地獄と天国の怒りから逃げるのだ、そして不実なあなたから、また私自身から逃げるのだ。 クレオフィーデ 少なくともあなたについて行かせてください。 ポーロ 私は常に周りに最大の苦痛を齎すことだろう。 クレオフィーデ では私を殺してください。 ポーロ あなたは幸せなるエリュシオン [祝福者の死後の楽土] で平和を乱すだろう。他の死者にとっては迷惑だ。 クレオフィーデ ああ、あなたが私を愛していた最初の幸運な時のために、私の真に不幸な愛の不信のために、甘美な人生は私をこのままにはしません。 ポーロ もうあなたを最愛のアレッサンドロに委ねましょう。 クレオフィーデ あなたはまだあなたの嫉妬の過剰を罰するために私が不安定さを装ったことを分かっています。

<p>PORO Ti conosco abbastanza. CLEOFIDE (s'inginocchia) Ecco a' tuoi piedi un'amante regina supplice, sconsolata e di frequenti lagrime sventurate aspersa il volto. PORO (Mi giunge a indebolir, se più l'ascolto.) (in atto di partire) CLEOFIDE Ingrato non partir. Guardami. (s'alza) Io t'offro un tragico ma forse spettacolo gradito agl'occhi tuoi. Voi dell'Idaspe, voi onde di quel crudel meno insensate, meco le mie sventure al mar portate. (va per gittarsi nel fiume) PORO Cleofide che fai? Fermati. Oh dèi! (corre per arrestarla) CLEOFIDE Che vuoi? Perché m'arresti adorato tiranno? È di mia sorte la pietà che ti muove? O ti compiacci di vedermi ogn'istante mille volte morir? PORO (Numi, che pena!) CLEOFIDE Parla. PORO Deh se tu m'ami, non dar prove sì grandi della tua fedeltà. Fingi incostanza; del geloso mio cor le furie irrita. Il perderti è tormento; ma il perderti fedele è tal martire, è pena tal che non si può soffrire.</p> <p>CLEOFIDE Io vi perdono o stelle tutto il vostro rigor. Compensa assai la sua pietade i miei sofferti affanni. PORO È questo astri tiranni il talamo sperato? È questo il frutto di tanto amor? Felicità sognate! Inutili speranze! CLEOFIDE Ancor, mio bene, noi siamo in libertà. Posso a dispetto dell'ingiusto destin darti una prova maggior d'ogn'altra. In sacro nodo uniti oggi l'India ci vegga; e questo il punto de' tuoi dubbi gelosi ultimo sia. Porgimi la tua destra, ecco la mia.</p> <p>PORO Ah qual tempo, qual luogo, quali auspici funesti per invitarmi a tanto ben scegliești! E celebrar dovrassi un real imeneo fra le ruine, fra le stragi, fra l'armi, in riva a un fiume, senz'ara, senza tempio e senza nume? CLEOFIDE All'azioni de' regi sempre assistono i numi; ara che basta è un cor divoto; e in questo clima o altrove, ogni parte del mondo è tempio a Giove. Prendi della mia fede, prendi il pegno più grande. PORO In tal momento la mia sorte infelice io non rammento.</p>	<p>ポーロ 私はあなたを十分に分かっている。 クレオフィーデ (ひざまずく) あなたの足元に、しなやかな女王の恋人を見て下さい。落ち着きがなく、とめどない不幸な涙が彼女の顔に千々に流れていきます。 ポーロ (聞くうちに弱気になる) (もうすぐ出発する) クレオフィーデ 離れないで。私を見て。 (立ち上がって) 私はあなたに悲劇的な、しかしおそらくあなたの目には楽しい光景を提供します。お前たちヒュダスペス川よ、お前たちその残酷で無意味な波よ、私は不幸と一緒に私自身を海にもたらしめます。 (川に身を投げに行く) ポーロ クレオフィーデ、何をする? やめろ。なんてこった! (彼女をつかまえるために走る) クレオフィーデ 何が欲しいですか? 愛する暴君、なぜ私をつかまえるのですか? 私の運命によってあなたを動かすのは憐れみですか? それとも、私が瞬間毎に千回死ぬのを見て喜んでいますか? ポーロ (何と、つらいことだ!) クレオフィーデ 仰って。 ポーロ あなたが私を愛しているなら、あなたの忠実さを示すそのような見事な証拠を与えないでください。不安定なふりをしてください。私の嫉妬深い心の怒りが増します。あなたを失うことは苦痛です。でもそれ以上にあなた自身の忠実を失うことは殉教であり、それは人が苦しみに耐えられないほどの痛みです。 クレオフィーデ ああ、星々 [運命の神々] よ、私はあなたにすべての厳格さをゆだねます。彼は彼の同情と私の苦しみへの悩みを大いに償っているのです。 ポーロ この天体 [運命の神々] は希望の愛の巢への暴君だろうか? これはそんなに多くの愛の果実だろうか? 幸せの夢だ! 役に立たない希望だ! クレオフィーデ それでも、私の最愛の人、私たちは自由です。不当な運命にもかかわらず、私はあなたに他の誰よりも多くの証を差し上げることができます。今日、インドが私たちを神聖な絆の中に見ることができますように。そしてこれがあなたの嫉妬深い疑念の最後になりますように。私にあなたの右手を出してください、これが私の右手です。[つまり結婚の申し出] ポーロ ああ、いつ、どこで、どんな悲惨な前兆が私を選ばれたものところに招待してくれるというのだろう! そして、私は廃墟のはざままで、虐殺のはざままで、武器のはざままで、川のほとりで、祭壇なしに、寺院なしに、そして神なしに王の賛美歌を祝うべきなのだろうか? クレオフィーデ 神々は常に王族の行動に参加します。十分な祭壇は敬虔な心です。そして、この地の気候や他の地の気候のもと、世界のあらゆる場所がジュピターの神殿です。私の信仰を受け取り、最大の誓約を受け取ってください。 ポーロ その時、私は自分の不幸な運命を忘れるだろう。</p>
--	---

<p>CLEOFIDE E PORO Sommi dèi, se giusti siete, protegete il bel desio d'un amor così pudico.</p>	<p>クレオフィーデとポーロ 高貴な神々よ、もし公正でいらっしゃるなら、 お守りください、そのようなささやかな 愛の美しい願いを。</p>
<p style="text-align: right;">Protegete...</p>	<p style="text-align: right;">お守りください… [繰り返し]</p>
<p>CLEOFIDE Ah ben mio, giunge il nemico.</p>	<p>クレオフィーデ ああ、いとしい人、敵が来ました。</p>
<p>PORO Vieni. Quest'altra via involarci potrà... Ma quindi ancora giunge stuol numeroso.</p>	<p>ポーロ こっちだ。この別の道に行くがいい… しかし、それ でも大勢の軍勢が来るだろう。幸せは短くすぐに不幸 になる！</p>
<p>Agl'infelici son pur brevi i contenti!</p>	<p>クレオフィーデ 逃げおおせるとは思えません。川の後ろで、アレクサ ンダーは私たちを止め、そこでティマゲーネも止める でしょう。これで私たちは四人です。</p>
<p>CLEOFIDE Io non saprei figurarmi uno scampo. A tergo il fiume, Alessandro ci arresta in quella parte e Timagine in questa. Eccoci prigionieri.</p>	<p>ポーロ ああ、神々よ、私はポーロの妻がギリシャ人の捕虜と なるのを見るのだろうか？ 惨めな対象に恥知らずな 一瞥を投げるのだろうか？ 彼女を卑劣なあざけりの 部隊に仕えさせるのか？ 誰がどんな新しい愛、どんな 新しい愛の巢のことを知っているのか！… ああ、私 は嫉妬の狂気の怒りから魂が燃え上がるのを感じる。</p>
<p>PORO Oh dèi vedrassi la consorte di Poro preda de' Greci? Agl'impudici sguardi misero oggetto? All'insolenti squadre scherno servil? Chi sa qual nuovo amore, qual talamo novello!... Ah ch'io mi sento dall'insano furor di gelosia tutta l'anima avvampar.</p>	<p>クレオフィーデ 夫よ、私たちはまだ自由の時を持っています。解決す るための忠告そして援助を信じて下さい。</p>
<p>CLEOFIDE Sposo, un momento ci resta ancor di libertà. Risolvi. Un consiglio, un aiuto.</p>	<p>ポーロ (ぶり返して) 彼はそこにいます。そういうことです、野蛮さはしか しあなたの心と私の心に必要で価値があるものです。 エリュシオンのあなたの影は死に、血色を失った体が 境界で私を待っています。</p>
<p>PORO (impugna uno stile) Eccolo. È questo, barbaro sì ma necessario e degn del tuo core e del mio. Mori e m'attenda l'ombra tua degl'Elisi in su la soglia senza il rossor della macchiata spoglia.</p>	<p>クレオフィーデ 何ですって！</p>
<p>CLEOFIDE Come!</p>	<p>ポーロ (彼は彼女を傷つけたいと思い停止する) そう、死んでくれ。なんてこった！ 凍り付きそうだ！ なんて怖い！ 足が震え、心臓が鼓動し、哀れな手が残 酷な所業から逃げる。ああクレオフィーデ、ああ妻、 ああ私の最愛の魂の部分、これは何の時だ！ そして、 落胆で泣き続けることすらできなかったのは誰だった のか。いとしい人、私の美徳に多くを望まないほうが よい。</p>
<p>PORO (Vuol ferirla e si ferma) Sì mori; oh dio! Qual gelo! Qual timor! Vacilla il piede, palpita il core e fugge dall'ufficio crudel la man pietosa. Ah Cleofide, ah sposa, ah dell'anima mia parte più cara, qual momento è mai questo! E chi potrebbe non avvilirsi e trattenere il pianto. Cara, la mia virtù non giunge a tanto.</p>	<p>クレオフィーデ おお優しさよ！ おお苦しみよ！</p>
<p>CLEOFIDE O tenerezze! O pene!</p>	<p>ポーロ (様子を窺う) 敵たちだ。私の愛する人の怒りを許そう、いとしい人、 許してくれ、死んでくれ。(彼女を傷つける行為)</p>
<p>PORO (guardando dentro la scena) Ecco i nemici; perdona i miei furori adorato ben mio, perdona e mori. (in atto di ferirla)</p>	

犬輔：「いとしい人よ」と共通の言葉が出てきたので朱記しておきました。“se giusti siete”と“protegete”です (giusto の男性複数 giusti と女性複数 giuste の違いはあり)。この二重唱の代替アリアの可能性が高いですね。

鳥代：その二重唱は確かに束の間の平和を歌ってはいるけれど、さらりとしすぎていて、その時点の二人の状況を歌い上げた歌詞ではないよね。そのことが代替アリアの生まれた一つの理由だったのかも知れないわ。

犬輔：その点「いとしい人よ」の方がポーロの嫉妬からの変心を——ありきたりの愛の言葉ではありますが——歌い上げています。自信と主体性に欠けるのは作詞者の意図でしょう。

3. メタステージョ自身による『インドのアレッシサンドロ』の改訂について

教授：メタステージョ自身が『インドのアレッシサンドロ』を改訂している。調査しなさい。

鳥代：メタステージョはヴィーンで校訂の作業を進めており、パリで校訂版出版にたずさわっていたカルツァビージ宛に 1754.1.15 付けで次の手紙を出しています^{注10}。「今回は『インドのアレッシサンドロ』を修正しました。最初の 2 幕はお勧めしました通りですが、第 3 幕はほぼ完全に更新し、現在、私はそれらに大いに満足しています。それがすでに旧稿で刻印されているとすれば非常に残念に思います。ご利用に間に合う場合は、すぐにお知らせください。シュミトマー社と同じルートでコピーをお送りします。このように、新版は以前の版とはまだ非常に異なっています。借金が増え、煩わしさが長々と耐えられないので、

私はあなたの愛情深い関心に感謝することに躊躇しません。私の感謝の気持ちをお忘れなきよう。あなたが私とともに常に尊敬と友情に溢れていることを願っています」。

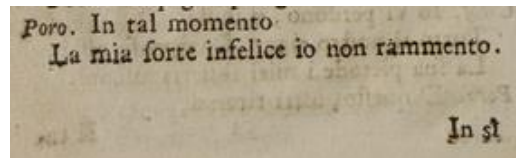
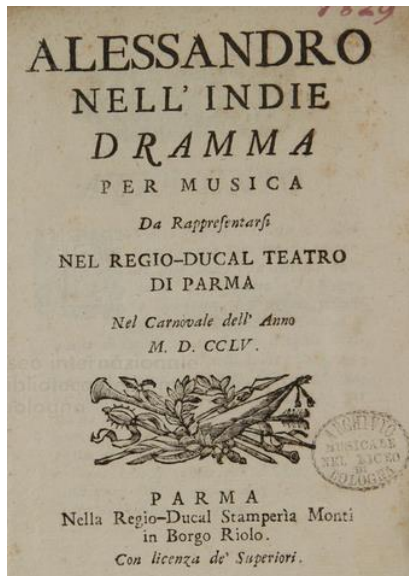
犬輔：ラインハルト・ヴィーゼント著『メタスタージョ自身のドラマ改訂と 1750 年代のオペラ音楽の状況』^{注11}によれば「25 歳頃のメタスタージョは彼のドラマを、変化した好みに適応させたいと考えていました。レチタティーヴォの長さでアリアの数を大幅に減らす必要性は、メタスタージョ自身が 1730 年代半ばからドラマを作曲する際に続いた一般的な傾向への賛辞でした。テキスト数の減少は、間違いなく、増え続ける音楽の広がりに対する対応です。言い換えれば、アリアはどんどん長くなりましたが、オペラの演奏の全体的な長さを自由に伸ばすことができなかつたので、音楽のためにテキストの一部を犠牲にしなければなりません」と背景を述べ、1730 年初版と 1754 年ガルツピ版（後述の 1755 年ガルツピ版とは異なる）を比較しています。「メタスタージョはレチタティーヴォから詩の約 3 分の 1 を削除し、アリアやその他の音楽的に形成されたナンバー曲（カヴァティーナ、デュエット、合唱）のテキスト数も 3 分の 1 に減らしました。さらに、メタスタージョは 2 つの完全なアリアと、2 つのアリアの後半部分を新作しています」。でもここにアリア「いとしい人よ」は含まれていませんでした。

4. アリア「いとしい人よ」が含まれている音楽用台本

4.1 ガルツピ《インドのアレッサンドロ》（1755 パルマ版）

犬輔：随分多くの作曲家のオペラがあるんですね^{注12}。「いとしい人よ」の歌詞があるか順に見ていきましょう。あっ、ありました。バルダッサレ・ガルツピが作曲し 1755 年にパルマで上演した台本^{注13}の第 2 幕第 6 場にポーロのアリアとして載っています。

鳥代：やはり『インドのアレッサンドロ』の台本に歌詞があったのね。



犬輔：でも、初版にはなく（ガルツピの版でも 1755 年以外の版にはない^{注14}）、メタスタージョの改訂なのかわからないとしてアイゼンは疑問符を付けたんだ。

鳥代：歌詞は同じなの？

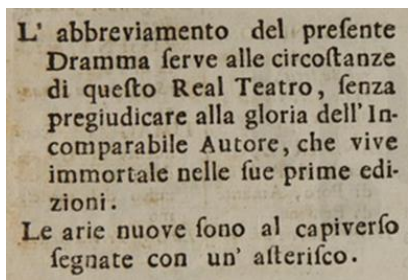
犬輔：それが K.deest とは一部が異なっているんです。ポーロのレチタティーヴォ・セッコのところからアリアにかけて訳してみましょ。朱色で区別しておきます。

表 3 ガルツピ《インドのアレッサンドロ》（1755 パルマ）第 2 幕 第 6 場の歌詞

歌詞	訳詞
Poro: In tal momento La mia sorte infelice io non rammento. Cara, se le mie pene Tutte scordar mi fai, Non separarti mai Da questo amante — cor. Stelle, se giuste siete, Pietose proteggete Il suo fedele affetto, (verso Cleofide) Il mio costante — amor.	ポーロ：その時 私は自分の不幸な運命を忘れるだろう。 いとしい人よ、もし私の苦しみのすべてを 私に忘れさせたいのなら、 この愛する心から決して 離れないでください。 星々よ、もし公正でいらっしゃるなら、 思いやりをもって 彼女の忠実な愛情と、（クレオフィードに向かって） 私の変わらない愛を守ってください。

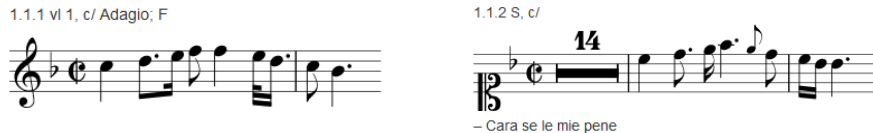
参考までに言うと、台本に記載されているポーロ役はカストラートのジョヴァンニ・マンツォーリです。

鳥代：この台本には右図の注記があります。「このドラマの短縮は —— 初版で不滅に生き続ける比類のない作家の栄光を損なうことなく —— この王立劇場の状況に役立ちます。新しいアリアは、パラグラフにアスタリスクでマークされています」。確かに台本をよく見ると代替歌詞の前にはアスタリスクが付けられており、上演の都合に合わせてパルマ王立劇場付き台本作家が改訂したのでしょうか。この注記のニュアンスではオリジナル作家名が書かれていないのは敬意から、改訂作家名が書かれていないのは謙譲からということも想像できるわ。



犬輔：それにこの注記は代替歌詞がメタステージのものではないことの決定的な証拠になるね。

鳥代：オペラの抜粋手稿譜がバイエルン国立図書館にあるわ。



犬輔：フランス国立図書館にも抜粋の手稿譜 Cara, se le mie pene. Voix, cordes (3), basse continue. Fa majeur があり、1 ページ目に筆者不明ながら Sig.re Giovanni Manzoli と書いてあると言います。

4.2 ニッコロ・ピッチンニ《インドのアレッサンドロ》(1758 ローマ版)

鳥代：もっと探してみましよう。ほら、ニッコロ・ピッチンニ作曲の 1758 年ローマ上演版の台本にもこのアリアがあるそうよ^{注15}。残念なことにネットでの台本閲覧はできないの。

犬輔：台本の情報は『1800 年以前のイタリア語リブレット』に載っていますよ (右図)。台本から引用された配役表により、ポーロ役がフェルディナンド・マツァンティということ、注記として「このドラマの短縮および小さな変化はこの高貴な劇場の状況に役立ちます」と書かれていることが分かります。そして書誌情報としては台本の所在がパレルモ市立図書館、ローマ・サンタ・チェチーリア音楽院、ローマ・バチカン図書館、そしてブリュッセル王立音楽院の 4 箇所であることが分かります。

ALESSANDRO NELL'INDIE. Drama per musica da rappresentarsi nel nobil Teatro di Torre Argentina il carnevale dell'anno 1758.
Roma, si vendono da Fausto Amidei. Pag. 71.
Scene di Prospero Pesci bolognese, Accad. Clementino.
Vestiaro di Giuseppe Pedocca, ricamato da Pietro Villa.
Abbattimento di Giuseppe Zompatori e Silvestro Togni.
Personaggi: Ercole Ciprandi milanese (Alessandro); Ferdinando Mazzanti di Pescia, virt. di camera di S.A.S. elettorale di Baviera (Poro); Antonio Priori milanese (Cleofide); Giuseppe Giustinelli d'Orvieto (Erissena); Paolo Fabbrini di Pescia (Gandarte); Giovanni Fecondi (Timagene).
Musica di Nicola Piccinni, maestro di capp. napoletano.
Balli di Francesco Salamon.
"L'abbreviamento e qualche piccola mutazione del presente drama servono alla circostante di questo nobil Teatro [...]".
I-PLcom - Rsc - Rvat (Ferraioli) B-Bc 776

教授：台本を参照できなくてもアンソニー・R・デル・ドンナ著『ニッコロ・ピッチンニと《インドのアレッサンドロ》の二つのイントネーション』(2004)^{注16} という論文では 1758 年版と 1774 年版の比較がなされている。この論文の所収書籍はすでに絶版で古書もなく、日本では大阪大学附属図書館にしかない貴重な本だが、WEB でスニペット表示による閲覧がcaろうじて可能である。また 1758 年版の楽譜も WEB で閲覧可能だ^{注17}。これらを組み合わせる必要情報を構築しなさい。

鳥代：教授は無理難題を課すのですね。何とかやってみますが。

犬輔：1758 年版による抜粋手稿譜もありますから併せて検討しましょう。結果を表 4 に示しましょう。台本にあつて総譜にない、あるいはその逆のナンバーが数多くありますので、それらは網掛けしました。

鳥代：デル・ドンナの論文から引用しましょう。「1758 年のピッチンニの台本のハイブリッドな様相と、アルジェンティーナ劇場で公演が上演された状況を考えると、オーケストラのスコアに大きな変化が見られることは驚くべきことではありません。表では、台本と 1758 年のスコアが比較されています。スコアでは最初の幕の長さが短くなり、ピッチンニがしばしば台本から遠ざかっていることは明らかです。特に、第 1 幕第 9 場のポーロのアリアは、メタステージ自身が 1754 年の改訂版で削除したのですが、第 2 幕第 4 場で再提案されています。一方、第 1 幕第 5 場のティマゲーネの“O su gli estivi ardori”と第 1 幕第 11 場のガンダルテ“Voi, che adorante il vanto”の場面を削除し、メタステージが改訂した 2 つのエピソードの永続性を期待する我々を困惑させるような選択をしました。

またピッチンニのスコアでは、ガンダルテのシーン(第 1 幕第 1 場)“È prezzo, leggiero”が再び登場しますが、1754 年と 1758 年の台本のバージョンでは姿を消しました。

第 2 幕の分析により、台本とスコアのその他の注目すべき違いが明らかになりました。台本間の長さの違いとスコアに第 3 幕がないことを考えると、ピッチンニが元の第 2 幕と第 3 幕から取られた要素を含む第 2 幕を作り上げたのは事実です。しかし、第 1 幕ですでに明らかのように、ピッチンニは 1758 年の台本に存在するいくつかのシーンを排除、あ

表 4 ピッチンニ《インドのアレックスドロ》1758 ローマ上演の関連資料

	1758 ローマ台本	抜粋譜	1758 ローマ総譜 (I-Nc)	抜粋譜
第 1 幕				
第 1 場	Recitativo secco		ガンダ ^{ルテ} È Prezzo leggiero	
第 2 場	ポーロ Vedrai con tuo periglio	GB-Lbl	ポーロ Vedrai con tuo periglio	GB-Lbl
第 3 場	アレックス ^{ドロ} Vil trofeo d'un alma imbellè		アレックス ^{ドロ} Vil trofeo d'un alma imbellè	
第 4 場	エリッセ ^ナ Chi vive amante, saic he delita	US-R	エリッセ ^ナ Chi vive amante, saic he delita	US-R
第 5 場	ティマゲ ^{ーネ} O su gli estivi ardori	D-B	ポーロ Se mai più sarò geloso	I-Mc
第 6 場	ポーロ Se mai più sarò geloso	I-Mc	クレオフィ ^{ーデ} Se mai turbo il tuo riposo	I-Mc
第 7 場	クレオフィ ^{ーデ} Se mai turbo il tuo riposo	I-Mc	Recitativo secco	
第 8 場	Recitativo secco		Recitativo secco	
第 9 場	ポーロ Se possono tanto		Recitativo secco	
第 10 場	Recitativo secco		Recitativo secco	
第 11 場	ガンダ ^{ルテ} Voi, che adorate il vanto		Recitativo secco	
第 12 場	Recitativo secco		Recitativo secco	
第 13 場	Recitativo secco		ポーロとクレオフィ ^{ーデ} Se mai turbo il tuo riposo	I-Tf
第 14 場	Recitativo secco			
第 15 場	Recitativo secco			
第 16 場	ポーロとクレオフィ ^{ーデ} Se mai turbo il tuo riposo	I-Tf		
第 2 幕				
第 1 場	Recitativo secco		Recitativo secco	
第 2 場	ガンダ ^{ルテ} Senza procelle ancora		ガンダ ^{ルテ} Superbo beato	
第 3 場	Recitativo secco		エリッセ ^ナ Non sarei sì sventurata	US-R
第 4 場	エリッセ ^ナ Non sarei sì sventurata	US-R	ポーロ Se possono tanto	
第 5 場	Recitativo secco		Recitativo secco	
第 6 場	ポーロ Cara, se le mie pene	US-Cn	Recitativo secco	
第 7 場	Recitativo secco		Recitativo secco	
第 8 場	Recitativo secco		アレックス ^{ドロ} Paventa del mio sdegno	I-Mc
第 9 場	クレオフィ ^{ーデ} Digli ch'io son fedele	GB-Lbl	Recitativo secco	
第 10 場	ポーロ Destrier che all'armi usato	US-Wc	ティマゲ ^{ーネ} Tutto il Ciel lo sdegno	
第 11 場	Recitativo secco		Recitativo secco	
第 12 場	アレックス ^{ドロ} S'è ver che t'accendi		三重唱 Paventa superbo decisa	
第 13 場	Recitativo secco		ガンダ ^{ルテ} A tua fatal rovina	
第 14 場	Recitativo secco		クレオフィ ^{ーデ} Se il Ciel mi divide	GB-Lbl
第 15 場	クレオフィ ^{ーデ} Il regno, il Consorte		Recitativo secco	
第 16 場			Recitativo secco	
第 17 場			ポーロ Dov'è s'affretti	US-Wc
第 18 場			クレオフィ ^{ーデ} Ombra dell'Idol mio	
第 19 場			合唱 Serva ad Eroe sì grande	
第 3 幕				
第 1 場	Recitativo secco			
第 2 場	Recitativo secco			
第 3 場	Recitativo secco			
第 4 場	クレオフィ ^{ーデ} Se troppo crede al ciglio	US-Cn		
第 5 場	エリッセ ^ナ Come il candore			
第 6 場	アレックス ^{ドロ} Serbati a grandi imprese			
第 7 場	Recitativo secco			
第 8 場	Recitativo secco			
第 9 場	Recitativo secco			
第 10 場	ガンダ ^{ルテ} Frena le smanie, e l'ire			
第 11 場	ポーロ Fra le smanie più crudeli			
第 12 場	Recitativo secco			
第 13 場	合唱 Serva ad Eroe sì grande			

るいは新しいアリアを挿入する選択をしました。1758 年の台本の第 2 幕と第 3 幕に存在する 12 のアリアから、ピッチンニはエリッセ^ナの“Non sarei sì sventurata”（私はそれほど不幸ではないでしょう）という 1 つだけを残しました。スコアには、ポーロ（第 1 幕第 2 場）、アレックス^{ドロ}（第 2 幕第 8 場）、ティマゲ^{ーネ}（第 2 幕第 10 場）、ガンダ^{ルテ}（第 2 幕第 13 場）の新しいアリアが含まれています。クレオフィ^{ーデ}の第 2 幕第 9 場の有名なアリア“Digli ch'io son fedele”が省略されているのが印象的です。スコアでは、1758 年の台本にはなかったパッセージが再び登場しますが、以前のバージョンに見つけることができます。第 2 幕第 14 場（クレオフィ^{ーデ}“Se il Ciel mi divide”（もし天が私を別れさせるなら）、第 17 場（ポーロ“Dov'è s'affretti”）、第 18 場（クレオフィ^{ーデ}“Ombra dell'Idol mio”）などのナンバーです。

18 世紀のオペラ制作の複雑な性質に確かに影響されている台本の行きつ戻りつの変種と 1758 年のスコアについて説明するのは確かに簡単ではありません。この特定のケースでは、1758 年の台本の序文は、いくつかの地域の要因が作品に変更を加えることを示唆

しており、ピッチンニのスコアの長さの減少も正当化しています。しかし、台本とピッチンニの音楽の選択が変更された理由については疑問が残ります。ピッチンニと台本作家の双方が、メタスタージョによって作成された 2 つのバージョンの『アレッサンドロ』[1730 年版と 1754 年版] に精通していました。彼らが一緒に作業したかどうかは不明です。むしろ、ピッチンニは、ドラマがどのように表現されるべきか、この観点に従って音楽を構成する、自由に使える素材を変更する、または単に新しいナンバーを含めるといふ、彼自身の個人的な見識を持っていたようです。このような状況を考えると、まったく的外れな方法とも思われますが、観客の期待が何かを問うことは正当であると思われまふ。おそらく、聴衆は『アレッサンドロ』の 2 つのメタスタージョのバージョンについて特定の知識を持っていませんでしたが、主題と当時の詩的・音楽的慣習についての一般的な知識を誇ることができたのです。

犬輔：抜粋譜の所蔵先(複数の所蔵先がある場合は代表して一箇所のみを表示)を記入しながら奇妙に思ったのは、台本にあって総譜にないナンバーの抜粋譜が存在していることです。第 2 幕第 6 場「いとしい人よ」もその例に相当します。ピッチンニは台本通り作曲を始めたものの、途中から方針を変えたため、作曲済みのナンバーを後の上演用として保管しておいたのだろうか。

教授：それは今となっては分からない。そもそも現存しているスコアには司書ロンディネラによるメモで「このドラマは序曲と第 2 幕における様々な点で異なっており、それゆえ 1758 ローマで上演された二つの幕と信じられる。序曲とガンダルテのアリアは自筆ではない」と書いてあるのみで、1758 年の上演で使われたことが証明されているわけではない。

鳥代：台本はどのようなコンセプトで書かれたのでしょうか。そこに「いとしい人よ」が入っていたのは誰が歌うためだったのでしょうか。台本にはフェルディナンド・マッツァンティがポロ役だと書かれていますが、彼のためだったのでしょうか。

教授：それも大いに疑問だ。配役名は台本の印刷直前に差し替えることができる。しかし本文の修正は巻末に正誤表を入れる程度の量を超えると不可能だ。今回の台本は、膨大な本文の修正を諦めた珍しい例になるだろう。

犬輔：台本を参照できないので歌詞の確認はできないんですが、抜粋手稿譜はシカゴ・ニューベリー図書館にありますよ。スコアリングは S, vl 1, vl 2, vla, b, ob (2), cor (2)です。

1.1.1 vl 1, c. Largo; Ejb



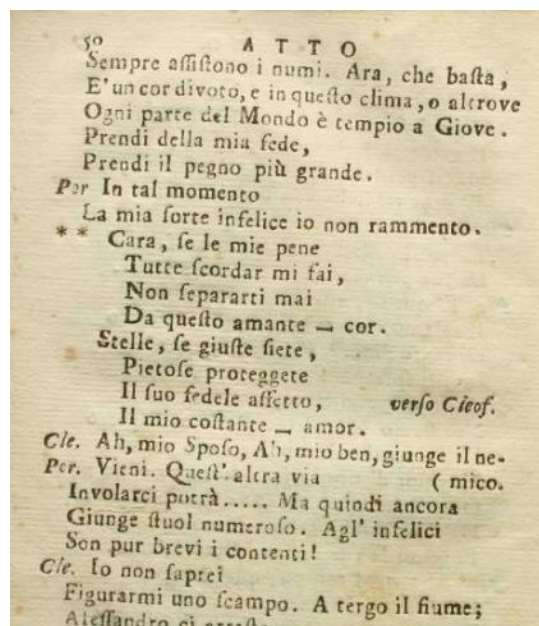
1.1.2 S, c; Ejb



- Cara se le mie pene

4.3 トンマーツ・トラエッタ《インドのアレッサンドロ》(1762 レッジョ・エミリア版)

鳥代：もう一つ見つかりました。トンマーツ・トラエッタ作曲、1762 年レッジョ・エミリア上演版です¹⁸。



犬輔：やはりアスタリスクが付けられていて、代替曲という運命を引き摺っていることが分かります。すなわちガルツピ 1755 パルマ版を参照していることは明らかだと思われます。

鳥代：台本によればポーロ役はガルツピ 1755 パルマ版と同じマンツォーリとなっています。

教授：ところがこんなチラシがある。ポーロ役が異なっているんだ^{注19}。



トンマーズ・トラエッタの《インドのアレッサンドロ》を祝うイラスト入りのソネット。左上から時計回りに、クレオフィーデ役のカテリーナ・ガブリエリ、ポーロ役のトンマーズ・グアルドウッチ、作曲家のトラエッタを描いている。

犬輔：そのチラシの出所は確かなものなのですか。

教授：1890 年の『ミラーノ音楽ジャーナル』に複製が載っており、次のコメントが付けられている：「レッジョ・エミリアのエンリコ・クルティ博士からの情報によると、彼が保有する、おそらく 1762 年にたくさん配布されたもののうち唯一残っている非常に貴重な印刷物コレクションである。マンツォーリは、馬車が転倒して大腿骨が破裂したため、自分のパートをグアルドウッチに引き渡さなければならなかった」^{注20}。100 年以上経っているが信じられる情報だと思われる。

鳥代：レーオポルト・モーツァルトもナポリからローマへの旅程の最後の方にさしかかったとき、馬車が横倒しになり、右足に裂傷を負っています（1770.6.26）。18 世紀後半の馬車による旅は、常に危険と隣り合わせにあったのですね。

犬輔：「いとしい人よ」をグアルドウッチが歌ったかどうかは別としても、元々はマンツォーリのために書かれた曲であろうことは十分にありうることなんだ。

鳥代：台本に記載されている歌詞はガルツピ 1755 パルマ版と全く同じものね。

犬輔：抜粋譜を載せておきましょう。楽器編成は S, vl 1, vl 2, vla, cor (2), b です。

1.1.1 vl 1, c/ Largo; Eb



1.1.2 S, c/; Eb



- Cara se le mie pene

4.4 ヨハン・クリスティアーン・バッハ《インドのアレッサンドロ》(1763 ローディ版)

犬輔：J・C・バッハの《インドのアレッサンドロ》にも「いとしい人よ」はあるのだろうか。

教授：アメリカのガーランド出版社から『ヨハン・クリスティアーン・バッハ作品選集（全 48 巻）』^{注21}が出ており、そのリブレット V の巻（1987）に Lodi (Carnival 1763) と Lodi (Carnival 1778) の台本が収められている。

犬輔：Google books のスニペット形式で不完全ながら検索できました。バッハ 1763 ローディ版、バッハ 1778 ローディ版の両方ともに「いとしい人よ」が含まれています。

Cara la mia virtù non giunge a tanto,
 Cara se le mie pene.
 Tutte scordar mi fai.
 Non separarti mai
 Da quello amante cor.
 Stelle se giuste siete
 Pietose proteggete
 Il suo fedele affetto
 Il mio costante amor.

Quel momento è mai questo? E chi potesse
 Non avvilirci, e trattener il pianto?
 Cara la mia virtù non giunge a tanto.
 Cara se le mie pene
 Tutte scordar mi fai.
 Non separarti mai
 Da quello amante cor.
 Stelle se giuste siete
 Pietose proteggete

鳥代：歌詞はガルツピ、トラエッタと同じですが、挿入場所が第 5 場であり、cor と amor の前のダッシュがなく、ト書きもありません。オペラ譜、抜粋譜は参照できませんでした。

教授：J・C・バッハにとって最初の《インドのアレッサンドロ》は 1762 ナポリ上演であるが、その台本には「いとしい人よ」が含まれていない^{注22}。1 年の差で台本に含まれるようになり、その後 15 年間変更されなかった理由が何かは不明である。因みに 1763 年のポーロ役はフランチェスコ・ロルフイであった。

4.5 ガルツピ《ソフォニスバ》(1764 トリーノ版)

教授：他にこの歌詞を使っている台本はなかったかね。

犬輔：マーガレット・ルース・バトラーの博士論文によれば「ガルツピの音楽劇《ソフォニスバ》はマンハイム版からトリーノ版への変更が多い。マッシニッサ役のマンツォーリはトリーノの公演で 5 曲のアリアを歌った。トリーノ版では 2 曲が歌詞を変えられ、2 曲が追加された。追加の 1 つ目は彼の第 2 アリアで台本とスコアの両者に載っている（差し替えアリアである）。追加の 2 つ目「いとしい人よ」は彼の第 3 アリアだが台本になく、おそらく第 2 幕第 5 場に追加されたのだろう。1755 年パルマでマンツォーリが歌ったガルツピ作の《アレッサンドロ》からのポーロのアリアのテキストと合致する^{注23}とあります。

鳥代：抜粋手稿譜がトリーノの Biblioteca civica musicale "Andrea Della Corte"にあります。楽器編成はソプラノ、ホルン 1、2、ヴァイオリン 1、2、ヴィオラ、バスとなっています。

1.1.1 vi 1, c/ Aria. Allegro; E|b



1.1.2 S Massinissa, c/ Allegro; E|b



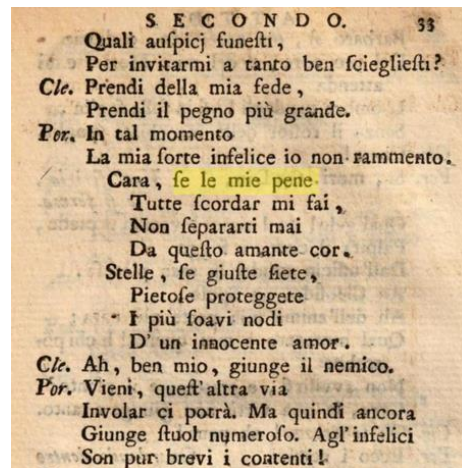
- Cara se le mie pene

犬輔：トリーノのアカデミー・フィラルモニカのアーカイヴ所蔵になるオペラ総譜では、歌唱声部に普通マッシニッサと役名を書くべきところ、そうではなくてマンツォーリと歌手名が書かれていると報告されているね^{注24}。

鳥代：テキストは 1755 年版から変更されていないと言うけれど、音楽はへ長調から変ホ長調に変えられ、テンポもアダージョからアレグロ [!] に速められているのよ^{注25}。

4.6 アントーニオ・サッキーニ《インドのアレッサンドロ》(1766 トリーノ版)

犬輔：まだあるよ。アントーニオ・サッキーニ作曲の 1766 年トリーノ版だ^{注26}。



鳥代：サッキーニの歌詞はさらに異なる部分があるわね。訳しましょう。

表 5 サッキーニ《インドのアレッサンドロ》(1766 トリーノ版) 第 2 幕第 5 場の歌詞

歌詞	訳詞
Porò: In tal momento La mia sorte infelice io non rammento. Cara, se le mie pene Tutte scordar mi fai, Non separarti mai Da questo amante cor. Stelle, se giuste siete, Pietose proteggete I più soave nodi D' un innocente amor.	ポーロ：その時 私は自分の不幸な運命を忘れるだろう。 いとしい人よ、もし私の苦しみのすべてを 私に忘れさせたいのなら、 この愛する心から決して 離れないでください。 星々よ、もし公正でいらっしゃるなら、 思いやりをもって 純真な愛の 心地よい絆を守っておくれ。

ガルツピ (1755 パルマ) とトラエッタ (1762 レッジョ・エミリア) の各版では相手の顔色を窺う演技が入っていて、恐る恐る彼女の愛を運命の神々に祈っている様子でした。そこに自分の変わらぬ愛も列記して (ついでに?) 祈っていました。サッキニー (1766 トリーノ) 版では列記をやめて柔らかい表現にしたのですね。でもオペラのアリアとしては少し表現が弱く、他人事のようにもあるわね。

犬輔：抜粋譜を載せてきます。スコアリングは S, vl 1, vl 2, vla, b です。

1.1.1 vl 1, c Cantabile; E|b



1.1.2 S, c; E|b

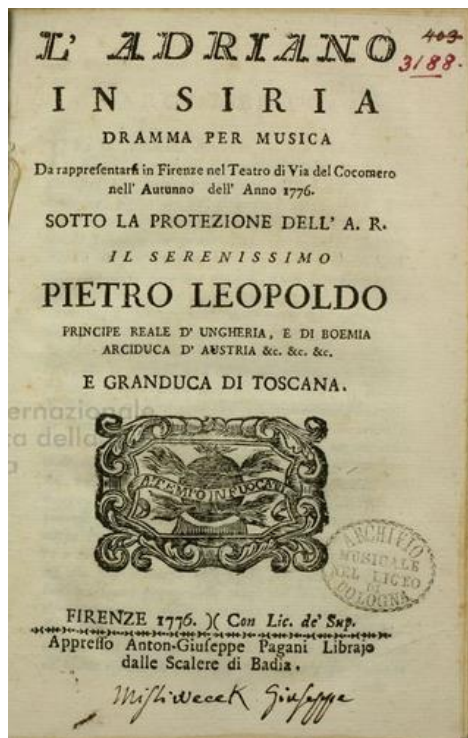


- Cara se le mie pene

鳥代：台本によればポーロ役はマンツォーリです。

4.7 ヨーゼフ・ミスリヴェチェク 《シリアのアドリアーノ》 (1776 年フィレンツェ版)

鳥代：ヨーゼフ・ミスリヴェチェクの音楽劇《シリアのアドリアーノ》(メタスタージョ台本)の1776年フィレンツェ上演版ではこのアリアを第2幕第7場のファルナスpegが歌っています^{注27}。解説がありましたので引用します。「1770年代の公演では、かつての時代を代表した台本が短縮され、当代のオペラの好みに合うように変更されたものと想定される。メタスタージョのテキストの作曲家による設定に、これほど多くの代替アリアテキストが含まれているものはない。ミスリヴェチェクのオペラの1776年の公演のために行われたテキストのカットと変更が何に帰属するかは不明である」^{注28}。



犬輔：歌詞がまた少し異なっていますね。訳してみましよう。

表6 ミスリヴェチェク《シリアのアドリアーノ》(1776年フィレンツェ版)第2幕第7場の歌詞

歌詞	訳詞
Cara, se le mie pene Tutte scordar mi fai, Non separarti mai Da questo amante cor. Stelle, se giuste siete, Pietose proteggete Il mio costante affetto Il suo pietoso amor.	いとしい人よ、もし私の苦しみのすべてを 私に忘れさせたいのなら、 この愛する心から決して 離れないでください。 星々よ、もし公正でいらっしゃるなら、 思いやりをもって 私の変わらない愛情、 彼女の慈悲深い愛を守っておくれ。

鳥代：台本によればファルナス役はグアルドゥッチなのですね。彼は 1762 レッジョ・エミリアでマンツォーリの代役を務めたので、その時に入手した「いとしい人よ」の歌詞を《シリアのアドリアーノ》で代替アリアとして流用したのではないのでしょうか。歌詞の手直しは基本的にオペラの筋に起因しているでしょう。

教授：些細な手直しと雖も台本の改訂であるから、劇場付きの台本作家の許可がなければ実現しない。作曲家か歌手の要望による手直しということだね。

犬輔：原詩そのものがネイティヴにとっても座りが悪く、そのために流用されるたびに何回も手直しされているということはないのでしょうか。

鳥代：登場人物の境遇の複雑さが絡んでいるのではないかとも思います。

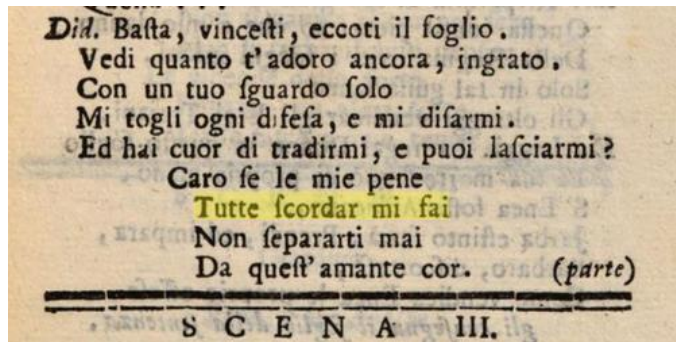
犬輔：それだけでなく、アリアが筋を説明するというタブーに挑戦し、結局上手くいっていないようなもどかしさも感じます。

教授：マンツォーリは 1776 年には既に引退しているので直接の関与はなくこの上演には無関係だということを一言付け加えておこう²⁹。

鳥代：抜粋譜はないようです。

4.8 作曲家不明《カルタゴのアエネーアース》(1772 フィレンツェ)

犬輔：作曲家不明の《カルタゴのアエネーアース》(1772 フィレンツェ) 第 2 幕第 2 場でディドーネが歌うアリアが男女の設定が逆ながら「いとしい人よ」の第 1 節を流用しています。



鳥代：男女が逆って何で分かるの？

犬輔：Cara が caro になっているということだよ。

表 7 作曲家不明の《カルタゴのアエネーアース》(1772 フィレンツェ版) 第 2 幕第 2 場の歌詞

歌詞	訳詞
Caro se le mie pene Tutte scordar mi fai, Non separarti mai Da questo amante cor.	いとしいひと(男)よ、もし私の苦しみのすべてを 私に忘れさせたいのなら、 この愛する心から決して 離れないでください。

鳥代：台本によればディドーネ役歌手はチェチーリア・ダヴィエスとなっているわ。

犬輔：このオペラの 1769 版には「いとしい人よ」はありません。そしてこの 1772 年版には Protesta (抗弁) として「誰かがこのドラマのタイトルを変更しようとは少しも考えなかったのかと問うでしょう。ドラマはそれ自体が不滅のメタスタージョのディドのすべての登場人物を示しています。与えられた命令を提供しなければならなかった人は誰でも尊敬をよく知っています。それは各部分に課せられています；しかし、読者が観察するように、状況によって望まれる変化は、タイトルの変更がまだ熟していないことを私たちに信じさせました」という宣言が載っています。改訂版としての言い訳なのではないでしょうか。

5. アリア「いとしい人よ、もし私の苦しみのすべてを」K.deest の譜例

犬輔：モーツァルトの曲の譜例を示すのを忘れていました。以下に載せておきます。

6. まとめ

鳥代：ここまでのところを一覧表にまとめておきましょう。

表 8 アリア「いとしい人よ、もし私の苦しみのすべてを」上演の変遷

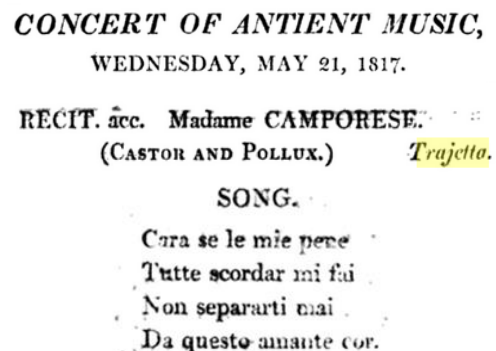
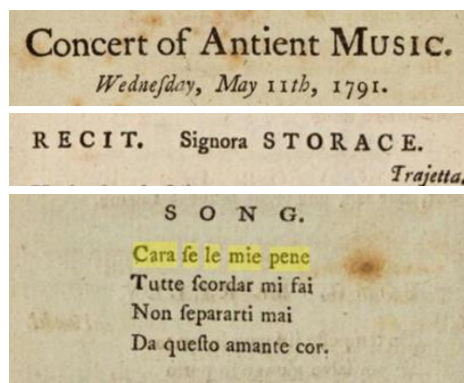
	所属オペラ、作曲家、上演年	抜粋譜から編成・インチピット	台本記載の歌手	備考
1	《インドのアレッサンドロ》 第 2 幕 第 6 場 ポーロのアリア (**付) ガルツピ 1755	S, 2vn, va, b 	マンツォーリ (抜粋譜冒頭にも マンツォーリと あり)	台本に改訂の 断り書き
2	《インドのアレッサンドロ》 第 2 幕 第 6 場 ポーロのアリア (*有無未調査) ピッチニ 1758	S, 2ob, 2cor, 2vn, va, b 	マツァンティ	台本に改訂の 断り書き オペラ譜には この曲無
3	《インドのアレッサンドロ》 第 2 幕 第 6 場 ポーロのアリア (**付) トラエッタ 1762	S, 2vn, va, b 	マンツォーリ 上演は役役の ゲアルドゥッチ	Vn1, 2, Va, bs, Fl1, 2, Ob1, 2, Hr1, 2, Fg1, 2 パートも有 ^{注30}
4	《インドのアレッサンドロ》 第 2 幕 第 5 場 ポーロのアリア J・C・パツハ 1763、1778	[譜例未調査]	ロルフィ (1763) モスカ (1778)	
5	《ソフォニスバ》 第 2 幕 第 5 場最後に挿入? マッシニッサのアリア ガルツピ 1764	S, 2cor, 2vn, va, bs 	マンツォーリ (オペラ譜歌声部 にもマンツォー リとあり) ^{注31}	台本にはこの 歌詞無
6	《インドのアレッサンドロ》 第 2 幕 第 5 場 ポーロのアリア サッキーニ 1766	S, 2vn, va, b 	マンツォーリ	
7	《シリアのアドリアーノ》 第 2 幕 第 7 場 ファルナスペのアリア ミスリヴェチェク 1776	[譜例未調査]	ゲアルドゥッチ	《シリアのア ドリアーノ》自 体の改訂上演
8	《カルタゴのアエネーアース》 第 2 幕 第 2 場 ディドーネのアリア 作曲家不明 1772	[譜例未調査]	チェチーリア・ ダヴィエス	女性が歌う歌 に手直し

犬輔：1755 年版、1762 年版、1766 年版の台本に書かれている歌手名は、カストラートのジョヴァンニ・マンツォーリです。またマンツォーリはこの 3 シーズン以外ではポーロ役を歌っていません。さらに 1764 年の《ソフォニスバ》でも歌っています。おそらくこの歌詞はマンツォーリ用に“宛て書き”^{注32}されたものだと思います。

鳥代：これらすべての上演でマンツォーリが歌った「いとしい人よ」の抜粋楽譜が残っていました^{注33}。しかも作曲家ごとに別々の曲なのです。上演時期はそれぞれ離れてはいるものの、マンツォーリがそれぞれの作曲家に“競作”させたということでしょう。

犬輔：マンツォーリ用“宛て書き歌詞による競作アリア New arias with my only one reserved text”と呼んでおきましょう。

鳥代：ガルツピ、ピッチニ、トラエッタ、サッキーニの曲に単独曲としての筆写楽譜があるということは、そのような用途での需要があったものと思われる。事実ロンドンでは Concert of Antient Music の演奏会でトラエッタの曲が取り上げられました。



1791 年にはナンシー・ストレーズ嬢が、1817 年にはキャンポレーズ夫人がそれぞれ第 1

節のみですがパステイッチョ・オペラの 1 曲としてレチタティーヴォを伴って歌っています。この習慣のおかげでトラエッタの曲は CD にもなって、今日でも鑑賞することができます^{注 34}。

教授: 先人たちによるモーツァルトの「いとしい人よ」への影響については今後の議論としよう。

注 (URL はクリック可能です) :

- 注 1 : 野口秀夫「モーツァルトのノットゥルノ K.346 (439a) & K.439 の見出された台本作者たち」神戸モーツァルト研究会 第 276 回例会 < <http://mozart.music.coocan.jp/276.pdf> >
- 注 2 : W. A. Mozart: Cara, se le mie pene, Arie für Sopran, zwei Hörner, Violine, Viola und Baß (Continuo-Cembalo ad libitum) Ohne Köchelnummer, Herausgegeben von Wolfgang Plath, Bärenreiter 4758 (1966)
- 注 3 : 1923 年に発見された K.45a と G16 は 1964 にアンナ・アマリーエ・アーベルトにより写譜師が作曲者名を相互に取り違えて記載しているとの説が出たが、1982 にレーオポルトとナンネルによる K.45a の筆写譜が見つかり、写譜師が正しかったことが証明された。プラートの序文が書かれた 1966 年にはまだ写譜師の取違い説が有力だった。
- 注 4 : 野口前掲例会資料
- 注 5 : H.C.ロビンス・ランドン監修、海老沢敏 日本語監修『モーツァルト大事典』平凡社 1996、103 頁
- 注 6 : Cliff Eisen, Simon P. Keefe: The Cambridge Mozart Encyclopedia, Cambridge University Press, 2006
- 注 7 : Alessandro nell'Indie. Drama per musica di Pietro Metastasio, fra gli Arcadi Artino Corasio, da rappresentarsi nel Teatro detto delle Dame, nel carnevale dell' anno 1730. Dedicato alla maestà di Giacomo III, re della Gran Bretagna &c. - In Roma : per il Zempel e il de Mey vicino a Monte Giordano, si vendono a Pasquino nella libreria di Pietro Leone all' insegna di San Gio. di Dio, [1730]
< <https://archive.org/details/alessandronellin00vinc/mode/2up> >
- 注 8 : Wikipedia: Alessandro nell'Indie (Metastasio) < [https://en.wikipedia.org/wiki/Alessandro_nell%27Indie_\(Metastasio\)](https://en.wikipedia.org/wiki/Alessandro_nell%27Indie_(Metastasio)) >
- 注 9 : ALESSANDRO NELL'INDIE Drama per musica. testi di Pietro Metastasio musiche di Leonardo Vinci Prima esecuzione: 2 gennaio 1730, Roma. < www.librettidopera.it >
- 注 10 : OPERE POSTHUME DEL SIGNOR ABATE PIETRO METASTASIO DATE ALLA LUCE DALL' ABATE CONTE D'AYALA.: TOMO SECONDO, Nella Stamperia ALBERTI, 1795, p.146
< https://books.google.co.jp/books?id=L2FkAAAACAAJ&dq=di+modo+ch%E2%80%9999io+ne+sono+presentemente+molto+pi%C3%B9+soddisfatto&hl=ja&source=gbs_navlinks_s_ >
- 注 11 : Reinhard Wiesend: Metastasio Revisionen eigener Dramen und die Situation der Opernmusik in den 1750er Jahren; in Archiv für Musikwissenschaft, 40. Jahrg., H. 4. (1983), Franz Steiner Verlag
- 注 12 : Corago, Repertorio e archivio di libretti del melodramma italiano dal 1600 al 1900, Università di Bologna のサイト < <http://corago.unibo.it/risultatoopere> > にて [Alessandro nell'](#) で検索下さい。
- 注 13 : Alessandro nell'Indie. Drama per musica da rappresentarsi nel Regio-Ducal Teatro di Parma nel carnevale dell'anno 1755. - Parma : nella Regio-Ducal stamperia Monti, [1755]
< <http://www.bibliotecamusica.it/cmbm/viewschedatwbca.asp?path=/cmbm/images/ripro/libretti/01/Lo1829/> >
- 注 14 : Alessandro nell'Indie dramma per musica in 3 atti, Compositore: Galuppi Baldassare (1706 - 1785), Librettista: Metastasio Pietro (1698 - 1782), Rappresentazioni < <http://corago.unibo.it/opera/0000058045> >
- 注 15 : Gerhard Allrogen: Die Cavatine in der italienischen Oper des 18. Jahrhunderts; in Festschrift Arno Forchert zum 60. Geburtstag am 29. Dezember 1985, Bärenreiter, 1986, p.142-149
- 注 16 : Anthony R. Del Donna: Niccolò Piccinni e le due intonazioni dell'Alessandro nell'Indie, in Niccolò Piccinni, musicista europeo: atti del convegno internazionale di studi Bari, 28-30 settembre 2000, Mario Adda Editore, 2004
- 注 17 : IMSLP: Piccinni, 1758, Biblioteca del Conservatorio di musica S. Pietro a Majella (I-Nc): Rari 2.2.17-18
< [https://imslp.org/wiki/Alessandro_nell%27Indie_\(Piccinni%2C_Niccol%C3%B2\)](https://imslp.org/wiki/Alessandro_nell%27Indie_(Piccinni%2C_Niccol%C3%B2)) >
- 注 18 : Alessandro nell'Indie. Drama per musica da rappresentarsi nel Teatro dell'illustrissimo Pubblico di Reggio per la fiera dell'anno 1762. All'altezza serenissima di Francesco III duca di Modena, Reggio, Mirandola ec. ec. ec. - In Reggio : per Giuseppe Davolio, [1762]
< <http://corago.unibo.it/esemplare/0000160209/DRT0001359> >
- 注 19 : Carlo Manfredi, Un sonetto illustrato celebrante Alessandro nelle Indie di Tommaso Traetta
< https://it.wikipedia.org/wiki/Tommaso_Guarducci#/media/File:Gabrielli,_Guarducci_e_Traetta.jpg >
- 注 20 : Gazzetta musicale di Milano, Anno XLV, N. 31 - 3 Agosto 1890, p.490
< https://www.google.co.jp/books/edition/Gazzetta_musicale_di_Milano/vFJAQAAMAAJ?hl=ja&gbpv=1&dq=alessandro+nell%27Indie++Reggio+Emilia++Guarducci&pg=PA490&printsec=frontcover >
- 注 21 : The Collected Works of Johann Christian Bach, 1735-1782, Vol. 1-48, Garland Pub
- 注 22 : Wikipedia: Alessandro nell'Indie (Bach)
- 注 23 : Margaret Ruth Butler, M. A.: Operatic Reform in Turin: Aspects of Production and Stylistic Change in the 1760s, Dissertation, Presented in Partial Fulfillment of the Requirements for the Degree Doctor of Philosophy in the Graduate School of The Ohio State University, 2000 の 247 ページ
- 注 24 : Mattia Verazi: Sofonisba: dramma per musica : da rappresentarsi nel Regio Teatro di Torino nel carnovale del 1764 alla presenza di S.S.R.M < https://books.google.co.jp/books?id=gQ1WbWjbNEkC&dq=Sofonisba&hl=ja&source=gbs_navlinks_s_ >
- 注 25 : Biblioteca civica musicale "Andrea Della Corte"から入手した抜粋譜のファクシミリによれば歌詞は変更なし。
- 注 26 : Alessandro nell'Indie. Drama per musica da rappresentarsi nel Regio Teatro di Torino nel carnovale del 1766 alla presenza di s.s.r.m. - Torino : Stamperia Reale, a spese di Onorato Derossi, [1766]
< <http://reader.digitale-sammlungen.de/resolve/display/bsb10578739.html> >
- 注 27 : Misliweczek Giuseppe: L'Adriano in Siria. Drama per musica da rappresentarsi in Firenze nel Teatro di via del Cocomero nell'autunno dell'anno 1776. Firenze, appresso Anton Giuseppe Pagani, 1776.
< <http://www.bibliotecamusica.it/cmbm/viewschedatwbca.asp?path=/cmbm/images/ripro/libretti/03/Lo03188/> >
- 注 28 : Wikipedia: Adriano in Siria (Mysliveček) < [https://en.wikipedia.org/wiki/Adriano_in_Siria_\(Myslive%C4%8Dek\)](https://en.wikipedia.org/wiki/Adriano_in_Siria_(Myslive%C4%8Dek)) >
- 注 29 : Wikipedia: Giovanni Manzuoli < https://en.wikipedia.org/wiki/Giovanni_Manzuoli >
- 注 30 : Traetta, 1762, F-Pn: D-18383 < <https://opac.rism.info/index.php?id=4> > にて [840018794](#) で検索。
- 注 31 : Margaret Ruth Butler, M. A.前掲書 p.289. 全曲譜は I-Tf: 1 V 19, fols. 1r - 6v
- 注 32 : “宛て書き” という用語は秋津緑『1783 年-1791 年にブルク劇場で初演されたオペラにおける創唱歌手の貢献』武蔵野音楽大学大学院音楽研究科 平成 27 年度学位 (博士) 論文から使わせていただいた。
- 注 33 : Galuppi, 1755, D-Mbs: Mus.ms. 182 < <https://opac.rism.info/index.php?id=4> > にて [456011406](#) で検索。
Piccinni, 1758, US-Cn: VM2.3.I88a < <https://opac.rism.info/index.php?id=4> > にて [114655](#) で検索。
Traetta, 1762, B-Bc: 4908 < <https://opac.rism.info/index.php?id=4> > にて [701002565](#) で検索。
Galuppi, 1764, I-Tci: Mus.Ms.53 < <https://opac.rism.info/index.php?id=4> > にて [850012153](#) で検索。
Sacchini, 1766, D-MÜs: SANT Hs 3483a < <https://opac.rism.info/index.php?id=4> > にて [451018878](#) で検索。
- 注 34 : Arie del '700 Italiano / Gonzalez, Savaria Baroque Orchestra, Pirona, Hungaroton Classic, HCD 32253, 2004
< <https://www.youtube.com/watch?v=2gyU913JoIU> >

(2021 年 3 月 5 日作成、2021 年 8 月 29 日改訂)

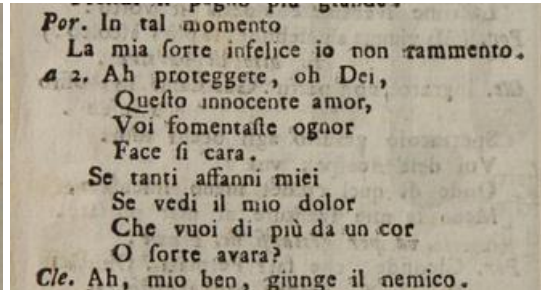
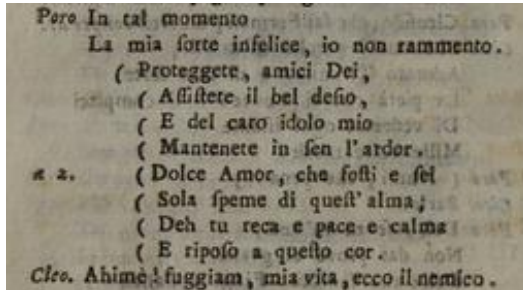
後日の談話室 —— 第 2 幕第 6 場の差し替え曲「いとしい人よ」とは別の案

犬輔：「いとしい人よ」は初版（1730）第 2 幕第 6 場の二重唱がさらりとしすぎていて登場人物二人の状況を歌い上げていないことにより、差し替えアリアとして生まれたのだらうということでした。そこで他の解決策を取っている版はないのかを参考までに調べてみました。

鳥代：そのような別案はモーツァルトの「いとしい人よ」（c. 1769）以前にもあったのですか？

犬輔：1769 前は、初版の二重唱のまま、二重唱をカット、アリア「いとしい人よ」に差し替え、のいずれかであり、新たな差し替え二重唱が出てくるのは 1771 年以降です。まずはフェルディナンド・ベルトーニ 1771 ヴェネツィア版第 5 場からどうぞ（左図）。

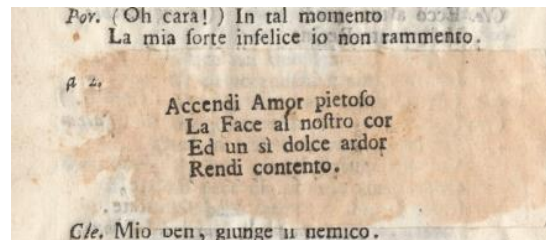
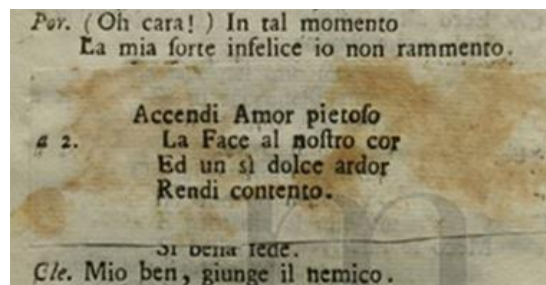
鳥代：a2 というのは“a due”で、ここでは一つの歌詞を二人で歌うことですね。斉唱か二重唱かは台本からは分かりませんが、二重唱でしょうね。



犬輔：次はアンフォッシ 1772 フィレンツェ版の第 5 場です（右図）。

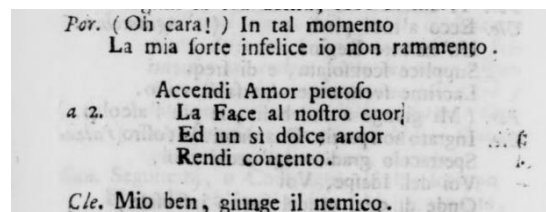
鳥代：a2 は同じですが、歌詞が異なっていますね。

犬輔：ジャコモ・ルスト 1775 ヴェネツィア版第 5 場も二重唱ですが、3 冊ありましたので並べてみましょう。右上図は正誤表を切り取って貼り付けていますが、貼り付け前の最終詩行“Si bella fede”が見えています。調べたところそのような最終詩行を持つ版は見当たらないので、ボツになった案なのかも知れません。右中図は貼り付けが綺麗に出来ています。そして右下図は新たに版を起こして印刷されたものです。ただし“...C”という元の詩行の組み版が残ってしまっているようです。これらは改訂が印刷工程中に発生したことを示しています。



教授：その新たに起こした版（右下図）では第 2 詩行の“cor”が“cuor”になっている。これは詩に馴染みのない植字工が版を起こしたのではないかと想像できるね。研究の足しにもならないトリビアだが。

鳥代：作曲家のルストについてはこんな記述がありました。「ルストはイタリアだけでなく外国でもオペラ作曲家として大きな名声を博し、ザルツブルクの大司教から雇用の招きがあった。1777.6.12、彼はザルツブルク宮廷の合唱団の監督に指名された。しかしこのポストは年末にかけて放棄された」注 34。モーツァルト不在中の出来事ですね。



犬輔：もう一つボツになった案が、ガルツピ 1755 パルマ版にもあるようです。台本 48 ページ（本稿 7 頁）の下部にある“次ページ冒頭との呼び合い表示”が“Cara”ではなく“In sì”となったままですので、“Cara, se le mie pene”になる前は“In sì...”で始まる歌詞だったとも思われます。ただし、その案で印刷された台本は見つかりませんでした。

教授：初版の二重唱は余程評判が悪かったようだ。そしてそれを解消した「いとしい人よ」はマンツォーリの属人性が強く誰でもが受け入れるものではなかった。そこで、各種の差し替え二重唱曲ができたということだろう。大わらわの劇場関係者の現場が彷彿とするね。

注：

注 34：Wikipedia: Giacomo Rust

（作成：2021 年 3 月 24 日）

後々日の談話室 —— 『インドのアレクサンドロ』 もう一箇所の新しいアリア

犬輔：改訂の断り書きに「新しいアリアは、パラグラフにアスタリスクでマークされています」と書いてありました。「いとしい人よ」の他にも新しいアリアはあったのでしょうか。

鳥代：ありますよ。第 2 幕第 14 場です。まず 1730 年の初版を訳しておきましょう。

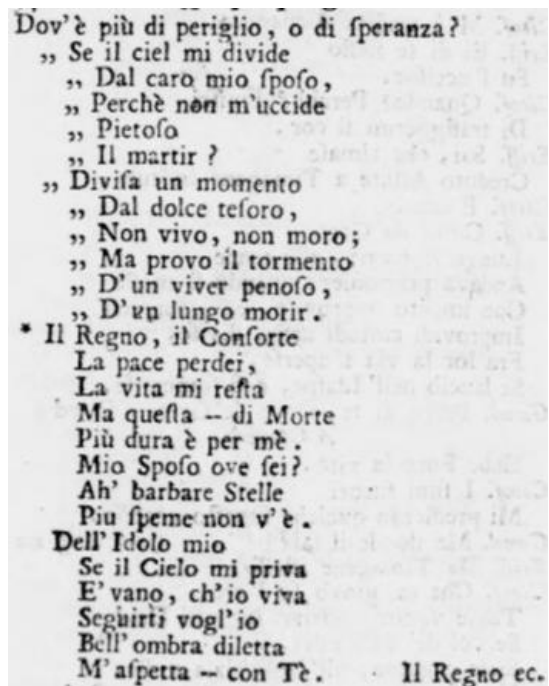
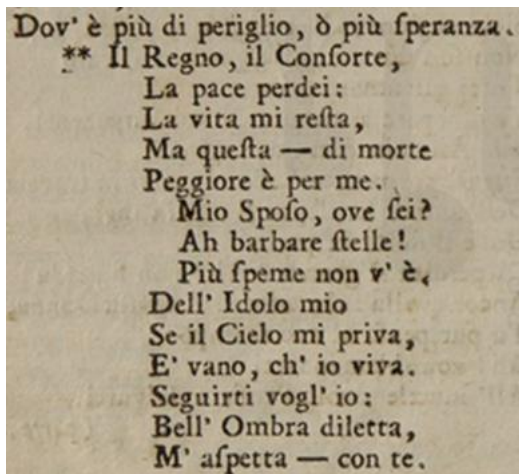
表 9 メタステージ初版《インドのアレクサンドロ》(1730) 第 2 幕第 14 場

初版	訳
Scena quattordicesima Cleofide, Gandarte, poi Erissena. CLEOFIDE Chi sperava o Gandarte tanta felicità fra tanti affanni! Quanto dobbiam a' tuoi felici inganni. GANDARTE Di vassallo e d'amico ho compiuto al dover. Pensiamo intanto quale asilo alla fuga sarà miglior, de' Gandariti il regno o la reggia de' Prasi. A te congiunti d'interesse e di sangue ambi i regnanti contenderanno a gara la gloria di salvarti, infin che passi questo nembro di Guerra in altro clima a desolar la terra. CLEOFIDE L'arbitrio della scelta rimanga a Poro. E ancor non viene! Oh quanto l'attenderlo è penoso! Ecco, io sento... Ma no, giunge Erissena. GANDARTE O come asperso ha di lagrime il volto! CLEOFIDE (ad Erissena che sopraggiunge) Eh non è tempo di pianto o principessa. È stanco alfine di tormentarne il ciel. Con noi respira, consolati con noi. Libero è il varco al nostro scampo e libera mi rende al mio sposo Alessandro; andremo altrove a respirar con Poro aure felici. ERISSENA Ah che Poro morì. CLEOFIDE Come! GANDARTE Che dici! CLEOFIDE M'ha tradita Alessandro. ERISSENA Ei di sé stesso fu l'uccisor. CLEOFIDE Quando? Perché? Finisci di trafiggermi il cor. ERISSENA Sai che rimase creduto Asbite a Timagene in cura. CLEOFIDE E ben? ERISSENA Cinto da' Greci lungo il fiume, alle tende andava prigionier, quando si mosse con impeto improvviso ed i sorpresi improvvisi custodi urtò, divise, fra lor la via s'aperse, si lanciò nell'Idaspe e si sommerse. GANDARTE (a Cleofide) Privo di te, servo de' Greci, in odio ebbe Poro la vita. CLEOFIDE I suoi furori mi predicean qualche funesto eccesso. GANDARTE (ad Erissena) Ma donde il sai?	第 14 場 クレオフィーデ、ガンダルテ、そしてエリッセーナ。 クレオフィーデ ガンダルテよ、多くの心配事にもかかわらずこんなにも幸せなことを誰が望めたでしょう！ 私たちはあなたの幸せな変装にどれだけ負っていることか。 ガンダルテ 家臣として、そして友人として、私は義務を果たしてきました。ところで、ガンダラの王国とカルケドンの宮殿のどちらへの亡命がより良いかを考えてみましょう。あなたに対する興味と血気が盛んな双方の支配者は、この戦争の大群が別の地域を通過して地球を荒廃させるまで、あなたを救うという栄光を求めて競い合うでしょう。 クレオフィーデ 選択の意思はポーロに任せます。そして、それはまだもたらされていません！ 彼を待つのはなんと辛いことでしょう。彼が来たのかしら… いいえ、エリッセーナだわ。 ガンダルテ おお、彼女の顔は涙で濡れています！ クレオフィーデ (到着したエリッセーナへ) さあ、涙を流している場合ではありませんよ、お姫様。彼女は天国を脅かした挙句疲れている。私たちと一緒に呼吸し、私たちと一緒に自分を慰めてください。自由が私たちの脱出への道であり、自由が私を夫のアレクサンドロに連れて行ってくれます。私たちは幸せな空気の中で呼吸するためにどこにでも行きます。 エリッセーナ ああ、ポーロは死にました。 クレオフィーデ 何ですって！ ガンダルテ 何を言っているんだ！ クレオフィーデ アレクサンドロは私を裏切った。 エリッセーナ 彼は彼自身の殺人者でした。 クレオフィーデ いつ？ どうして？ 私の心臓を突き刺してください。 エリッセーナ 彼はティマゲーネの策略でアビーテだと信じられていたのをご存知でしょう。 クレオフィーデ それで？ エリッセーナ 川沿いをギリシャ人に囲まれて囚人はテントに連れて行かれました。彼は突然の勢いで動き、突き飛ばされ驚いた護衛たちの間に開いた道を分け、ヒュダスベスに身を投げ、そして沈みました。 ガンダルテ (クレオフィーデへ) ギリシャ人のしもべとしてのあなたを奪われたポーロは、憎しみの中で生きていました。 クレオフィーデ 彼の怒りは私に致命的な結末を予告していました。 ガンダルテ (エリッセーナへ) だが、どこからそのことを？

<p>ERISSENA Da Timagene istesso. CLEOFIDE Che mi giovò su l'are tante vittime offrirvi ingiusti dei; se voi de' mali miei siete cagione, all'ingiustizia vostra non son dovute; e se governa il caso tutti gl'umani eventi, vi usurpate il timor numi impotenti.</p> <p>GANDARTE Ah che dici o regina. Un mal private spesso è pubblico bene e v'è sempre ragione in ciò che avviene. Fuggi, torna in te stessa, pensa a salvarti. CLEOFIDE A che fuggir? Qual danno mi resta da temer? Lo sposo, il regno misera già perdei; si perda ancora la vita che m'avanza. Dov'è più di periglio, ho più speranza. Se il ciel mi divide dal caro mio sposo, perché non m'uccide pietoso il martir. Divisa un momento dal dolce tesoro, non vivo, non moro; ma provo il tormento d'un viver penoso, d'un lungo morir.</p>	<p>エリッセーナ ティマゲーネから。 クレオフィーデ 非常に多くの 祭壇上の犠牲者があなたに不当な神々を申し出ていることを私は知らされました。あなたが私の悪の原因であるならば、それらはあなたの不正によるものではありません。そして偶然がすべての人間の出来事を支配するならば、あなたは無力な神々への恐れを奪います。 ガンダルテ ああ女王様、何を仰っているのですか。不当に私的なものは公共財であることが多く、何が起こるかには常に理由があります。お逃げ下さい、ご自分に戻り、ご自分を救うことをお考え下さい。 クレオフィーデ 何から逃げるのですか？ 恐れ失うものは何ですか？ 夫も、惨めな王国も既に失っています。私にまだ残っている命も失われましょう。より危険があるところに、より希望があります。 天が愛する夫から 私を引き離すなら、 なぜ殉教者として私を 慈悲深く殺さないのですか。 甘美な宝物からの 一瞬での別離、 私は生きるでもなく死ぬでもなく、 でも、苦痛は感じます 辛い生活の 長い死の苦しみを。</p>
(parte)	(去る)

犬輔：粗筋によれば第 2 幕最後の「エリッセーナがやって来て、ポーロがヒュダスパスに身を投げて死んだと報告します。エリッセーナは絶望的なクレオフィーデに逃げるように忠告します」というところに該当しますね。

鳥代：ガルツピ 1755 パルマ版 (左図) ではこの場のクレオフィーデによるアリア「天が愛する夫から Se il ciel mi divide」がもう一つのアスタリスクが付いた別の歌詞になっているのです。



犬輔：この改訂もやはりガルツピ 1755 パルマ版 (左図) が最初なんですか。

鳥代：いいえ、もっと前からなの。最初の改訂はハッセ 1736 ヴェネツィア版 (右図) のようなのよ。

犬輔：その最初の版 (右図) では新しい曲にアスタリスクが付けられているだけでなく、古い曲には引用符 “,,” が付けられていて新旧どちらでも歌えるようになっているんですね。

教授：そうなのだ。その後ハッセ 1738 ヴェネツィア版、フランチェスコ 1738 マドリッド版、ガルツピ 1755 パルマ版、ピッチニ 1758 ローマ版にこの歌詞は使われていくのだ。

鳥代：では歌詞を訳しておきましょう。ガルツピ版だけ一部異なるので注記しておきます。

表 10 第 2 幕 第 14 (9, 15) 場 クレオフィーデのアリア「王国、配偶者」の歌詞

歌詞	訳詞
Il regno, il consorte, La pace perdei; La vita mi resta, Ma questa — di morte Più dura [Galuppi: Peggior] è per me. Mio sposo, ove sei? Ah, barbare stelle, Più speme non v'è. Dell'idolo mio Se il cielo mi priva È vano ch'io viva; Seguirti vogli'o, Bell'ombra diletta, M'aspetta — con te.	王国、配偶者、そして 平穏を私は失いました。 命はながらえています、 もっと厳しい [ガルッピ版: 最悪の] —— この死が 私には相応しい。 私の夫よ、あなたはどこに? ああ、荒々しい星々よ、 これ以上の希望はありません。 天が私の愛する人を 奪うのなら 私に生きる意味はありません。 私はあなたの後を追いたい、 美しい最愛の魂よ、 私をお待ち下さい —— あなたも待っていて。

犬輔：メンケッリ＝ブッチェーニは 1730 年版のクレオフィーデによるレチタティーヴォ及びアリアの単語、“Lo sposo, il regno”、“Se il ciel mi divide dal caro mio sposo”“non vivo, non moro”、“d'un lungo morir”などが「王国、配偶者 Il regno」の歌詞の“*Il regno, il consorte*”、“*Dell'idolo mio Se il cielo mi priva*”、“*La vita mi resta*”、“*Ma questa di morte*”にそれぞれ対応しているので、この「王国、配偶者」のアリアはよそから持ってきたのではなく、この曲のために新たに誰かが作ったテキストであろうと言っています^{注35}。“誰か”はおそらくヴェネツィア・サンジョヴァンニ・グリズストモ劇場付き台本作家ですよ。

鳥代：そうですね。差し替えされた同じ歌詞が違う作曲家によって作曲されているということはやはり歌手の存在が気になります。調べてみましょう。

表 11 第 2 幕 第 14 (9, 15) 場 クレオフィーデのアリア「王国、配偶者 Il regno」

	所属オペラ、作曲家、上演年	台本に記載の歌手、歌詞	備考
1	《インドのアレッサンドロ》 第 2 幕 第 14 場 クレオフィーデのアリア (*付) ハッセ 1736 ヴェネツィア	ヴィットーリア・テシ <i>Il regno, il consorte</i>	引用符付き (省略部分の意) のオリジナル歌詞と並記
2	《インドのアレッサンドロ》 第 2 幕 第 14 場 クレオフィーデのアリア ハッセ 1738 ヴェネツィア	コスタンツァ・チェッリ <i>Il regno, il consorte</i>	
3	《インドのアレッサンドロ》 第 2 幕 第 14 場 クレオフィーデのアリア フランチェスコ 1738 マドリッド	ローザ・マンチーニ・フロレンティーナ <i>Il regno, il consorte</i>	
4	《インドのアレッサンドロ》 第 2 幕 第 15 場 クレオフィーデのアリア (**付) ガルッピ 1755 パルマ	アガータ・コリッツィ <i>Il regno, il consorte</i>	台本に改訂の断り書き有
5	《インドのアレッサンドロ》 第 2 幕 第 9 場 クレオフィーデのアリア (*未調査) ピッチェニ 1758 ローマ	アントーニオ・プリオーリ <i>Il regno, il consorte</i>	台本に改訂の断り書き有

犬輔：ヴィットーリア・テシ Vittoria Tesi (1701-75) が口火を切っていることだけは分かりました。確かに「新しいテキストは、ヴィットーリア・テシ・トラモンティーニの歌と演技のスキルを優れたものにするため」^{注36}という説もあるんだけど、1 回しか歌わず、他の歌手に歌うのを譲っています。マンツォーリのように持ち歌にしていけないのは何故なんだろう。

教授：その検討の前に、テシ (日本ではテージと発音されるがイタリア語の Wikipedia サイトではテシの発音となっている) はテシ＝トラモンティーニの二重姓で呼ばれることもあり、フィレンツェ出身であるためにフィオレンティーナ (la Fiorentina)、またアフリカの黒人の血を引くためにモレッタ (la Moretta) のニックネームで呼ばれた。男性役と女性役の両方をこなし、カストラートのファリネッリとは親しい友人だったという。メタスタージョとハッセからも評価されていた。ただし 1754 以後は舞台に立っていないのでモーツァルトとの面識はない。

鳥代：テシが持ち歌にしていけない理由は分かるかもしれないわ。テシが歌った第 2 幕 第 14 (9, 15) 場 クレオフィーデのアリアには全く別の歌詞もあるの。つまり、ハッセ 1743 ヴェネツィア版、ハッセ 1743 フィレンツェ版、ヴァーゲンザイル 1748 ヴィーン版、トラエッタ 1762 モデーナ版の歌詞が表 12 の通りそれぞれが全く異なっています。

表 12 第 2 幕 第 14 場 クレオフィーデの新規代替アリア

所属オペラ、作曲家、上演年	台本に記載の歌手、歌詞	備考
1 《インドのアレッサンドロ》 第 2 幕 第 14 場 クレオフィーデのアリア ハッセ 1743 ヴェネツィア	ヴィットーリア・テシ Non ho più core	
2 《インドのアレッサンドロ》 第 2 幕 第 14 場 クレオフィーデのアリア ハッセ 1743 フィレンツェ	ヴィットーリア・テシ Perdona, amato bene	
3 《インドのアレッサンドロ》 第 2 幕 第 14 場 クレオフィーデのアリア ヴァーゲンザイル 1748 ヴィーン	ヴィットーリア・テシ Se bastano gli affanni	

このようにテシは出演のたびに新しい歌詞を準備して作曲を依頼していたのです。

犬輔：つまり、ヴィットーリア・テシはマイ・クレオフィーデを公演ごとに劇場付き台本作家・作曲家に要求し、公演後に役を脱皮し続けた（その都度曲を捨てるか他人に譲った）ということですね。これらの曲にはヴィットーリア・テシ用“宛て書き競作歌詞による競作アリア My new arias with respective texts”と命名しておきましょう。

教授：マンツォーリの場合との共通点は何かあるのかね。

鳥代：この時代には歌手が強い力を持って前に出ているという共通点が、台本作者の影が薄れてしまっていることにも通じているのかなと思うようになりました。作曲家の名前がかりうじて残っているのが不思議なくらいです。

犬輔：それでも新しい歌詞を提供した台本作者は何か痕跡を残そうとしたのではないかと思ひ歌詞とにらめっこしてみました。

鳥代：ところがどっこい、犬輔さんが笑ってしまって負けたのでしょうか？

犬輔：いいえ、こちらが勝って笑いました。

教授：どういうことかね。

犬輔：「王国、配偶者」の初版であるハッセ 1736 ヴェネツィア版（本稿 19 頁、右図）と「いとしい人よ」の初版であるガルッピ 1755 パルマ版（本稿 7 頁）には—— 20 年もの差があるにもかかわらず—— 共通の特徴があるんです。よく見比べて下さい。

鳥代：気を持たせるわね。早く言ってちょうだい。

犬輔：それは後半にダッシュが付いている詩行が 2 つずつあることです。このようなダッシュは他の部分にはありません。すなわちメタステージョが書いた部分にはありません。したがってこれを差し替えアリアの作詩者の特徴（目印）とみなすことができるのではないかと思います。

教授：よく気が付いたものだ。20 年の間隔が空いていて、しかも場所が異なるため劇場付き台本作家が同一人とは考えられないから、1736 版の特徴を 1755 版が真似したと考えるのが妥当であろう。では、その特徴を備えた 1736 の作詩の意図は何だろう？

犬輔：ぼくはダッシュの意味を考えました。これは歌う時にそのあたりにメリスマを持ってきてほしいという作曲家への要望、そして読者に対してはメリスマがここに来るというサービス表記ではないかと思ひます。そうであれば、作詞者は歌手の代弁者にもなっているのではないかと思うのです。

鳥代：唯一聴くことができたトラエッタの「いとしい人よ」では特にそこだけがメリスマになっているわけではないわ。ガルッピの場合はどうなのでしょうね。でも、台本作家が歌手の言いなりになっているのではないかという主体性の問題提起というのは私と同じね。

教授：その検討にお話し向きのものが表 12 の新しい歌詞だ。歌手のテシがこれらの作詞をどの程度まで提案できるものか、評価してみてもどうか。

犬輔：ではぼくが訳しましょう。表 13 です。

表 13 第 2 幕 第 14 場 クレオフィーデの新規代替アリアの歌詞

歌詞	訳詞
Non ho più core, Non ho consiglio, Sento il dolore, Temo il periglio. Il dover mio... Lo sposo ... oh Dio! Chi sfortunata v'è pou di me?	私にもう心はありません、 忠告は不要です、 痛みを感じ 危険を恐れています。 私の義務は… 夫よ… ああ、神様！ 私より不幸な人がいるのでしょうか？

Potessi almeno Questo momento L'alma agitate Trarmi dal seno Ch'altro content Per me non v'e! Non hò ec.	私は少なくとも この瞬間に あなたの魂を揺さぶりました。 胸から私を引き出して下さい 他にどんな内容が 私にあるでしょうか！ 私にもう心は…
Perdona, amato bene, Se a te comparvi infida; Caro, vedrai quai pene Soffre un'amante cor. Fato perverso, e rio Lieta a morir m'invio: Non temo il tuo rigor. Perdona, ec.	許して下さい、最愛のひと、 あなたが疑わしく見えたのです。 いとしい人よ、あなたは恋人の心が 痛みに苦しんでいるのを見てください。 ひねくれた運命よ、 私は喜んで死にます： 私はお前の厳しさを恐れませんが、 許して下さい…
Se bastano gli affanni A togliermi di vita: Lasciatemi o tiranni, Lasciatemi morir. Non è il morir funesto, Una pietà detest, Che a viver mi condanni, A vivere, e languir. Lasciatemi o tiranni, Lasciatemi morir. (Parte.)	心配事が私の命を 奪うに十分なら： 私の思うままに、暴君よ、 私を死なせてください。 私が生きて、生きて、そして 衰弱すると運命づけられても それは致命的な死でなく、 嫌悪すべき哀れみです。 私の思うままに、暴君よ、 私を死なせてください。 (退場)

鳥代：プロの台本作家のオリジナリティによるものか歌手の素人提案の歌詞採用によるものか、日本人の私には分かりません。日本語訳があまりに稚拙で、評価できないためもあります。

犬輔：やっぱりプロの作詩家のオリジナルですよ。新しい歌詞は他の歌手の差し替えエリアにもあるので、それらがすべて歌手の提案歌詞だとは考えられません。例えばトラエッタ 1762 モデーナ版の歌手（カテリーナ・ガブリエッリ）のエリアはさらに異なる歌詞なのです。

表 14 第 2 幕 第 14 場 クレオフィーデの新規代替エリア

	所属オペラ、作曲家、上演年	台本に記載の歌手、歌詞	備考
4	《インドのアレッサンドロ》 第 2 幕 第 15 場 クレオフィーデのARIA トラエッタ 1762 モデーナ	カテリーナ・ガブリエッリ Non mi vedrai dolente	

鳥代：歌詞の翻訳は任せてね。

表 15 第 2 幕 第 14 場 クレオフィーデの新規代替エリアの歌詞

歌詞	訳詞
Non mi vedrai dolente, Caro, fra le catene; Fedele a te, mio Bene, Seguace tua sarò. I Regni, e I Re non sono Sicuri più sul trono. Viva con tal'empio, Regni chi regnar può. Non ec.	私が鎖に繋がれ苦しむのを、 いとしい人よ、あなたは見ることはないでしょう。 愛する人よ、あなたに忠実に 私は後を追いましょう。 王国も王ももはや 王冠で安泰という訳にはいきません。 このように生き、統治できる人ならば 誰でも統治して下さい。 私が鎖に繋がれ…

教授：台本の至るところに短縮や改訂があり、それらは劇場の都合によるものであり、一方で差し替えエリアは歌手からの要求によるものであろう。モーツァルトは“曲を歌手にぴったり作曲する”ことを旨としていたが、一般に台本作家も差し替えエリアの“詩を歌手にぴったり作曲する”ことを目指したに違いない。その点でマンツォーリの場合は手直し程度で歌詞が本人にぴったりだったということだが、テシの場合は公演ごとにぴったりの歌詞を要求したのである。『インドのアレッサンドロ』の差し替えエリアは各都市の劇場付き台本作者の能力の高さがよく分かる好例として位置付けられるのではないかと。

注：

注 35 : Francesca Menchelli-Buttini: Hasse e Vivaldi, in Antonio Vivaldi. Passato e futuro, a c. di Francesco Fanna e Michael Talbot, Venezia, Fondazione Giorgio Cini, 2009, pp. 487-507, pubblicazione on line www.cini.it

注 36 : Demetrio, Johann Adolf Hasse - G. Ricordi, Edited by Francesca Menchelli-Buttini & Reinhard Strohm. A facsimile reproduction of the opera, p.LXX

(2021 年 3 月 19 日作成、2021 年 3 月 24 日改訂)